

## 奄美大島歴史深訪（5）

— 安徳天皇を守ったとされる平氏公達のもう一つの伝説 —

広島文化学園大学名誉教授

佐々木 秀 美

広島文化学園大学看護学研究科・看護学部教授

中 村 哲

**要旨** 本論では、『平家物語』を中心に、栄華を極めた清盛の人物像及びその影響をまともに受け、死亡説のある安徳天皇、逃亡の果てに奄美大島に来島したとされる平氏公達の足跡を辿って高知県馬路村、越知町の横倉山、硫黄島、喜界島の实地調査も含めながら論述した。中でも清盛の悪行が子孫たちに災いを成し、平氏は壊滅状態の壇ノ浦から、安徳天皇を擁した重臣達の決死の逃避行は、方々にその足跡を残すものであり、ややもすれば身代わり説を流しながら、確かにその地に痕跡が残っていた。源氏の旗印に絶えず怯えながらの逃亡の日々であったが、彼らの多くは、逃亡先の文化に溶け込み、又は新しい文化を島に流入しながら、適応していった過程が見受けられる。本論で取り上げた平氏の公達は、奄美大島迄逃げおおせたと考えられる者達で、その他、多くの平氏の者達が南島の島々あるいは九州や中国・四国地方の山中で、殺されるという恐怖の中で過ごし、逃亡・潜伏そして逃亡の末にたどりついた先で戦いとは縁のない人々との交流で安息を得られたとしたら幸いである。源平の闘いは、敦盛最後にも見受けられるように人々の悲しみを誘う内容であり、青葉の笛の歌と共に長く語り継がれた悲哀であった。

**キーワード：**平家物語、平清盛、安徳天皇、建礼門院、平氏公達

### はじめに

『平家物語』<sup>1)</sup>は、平清盛（1118-1181）を主とした平氏の栄華と没落についての物語である。その筆頭に述べられる「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。」<sup>2)</sup>という言葉が著作の内容すべてを表現しているように考えられる。琵琶法師が琵琶を奏でながら一つ一つの事象と一人一人の人物を民衆に語り掛けるような内容であり、各節の最後は涙にくれる場面が多い。清盛の死後、力を落とした平氏は、“壇ノ浦の戦い”で源氏に負け、多くの兵士が死亡した。その物語は、物語とは言え日本の歴史上の重要な一遍であり、登場人物も紛れもなく事実で架空の人物達ではない。

下図は桓武平氏の系図であり、壇ノ浦で死亡したとされる人物を黄色の枠で示した（図1）。その戦死者は安徳天皇（1178-1185）他平氏公達の平資盛（1161-1185）、平有盛（1164-1185）、平行盛（不詳-1185）の他に、清盛が弟の平教盛（1128-1185）とその次男、平教経（1160-1185）が含まれる。しかし、言い伝えによれば、安徳天皇危機を察した平氏は、“壇ノ浦の戦い”で身代わりを立てたとされ、300人ほどの平氏郎党が安徳天皇と共に高知県に逃れ、最終的に離散した後、それぞれが当該地で死亡した。ある

連絡先：佐々木 秀美

〒177-0051 東京都練馬区関町北5-15-30-304

E-mail: grace55hidemi@gmail.com

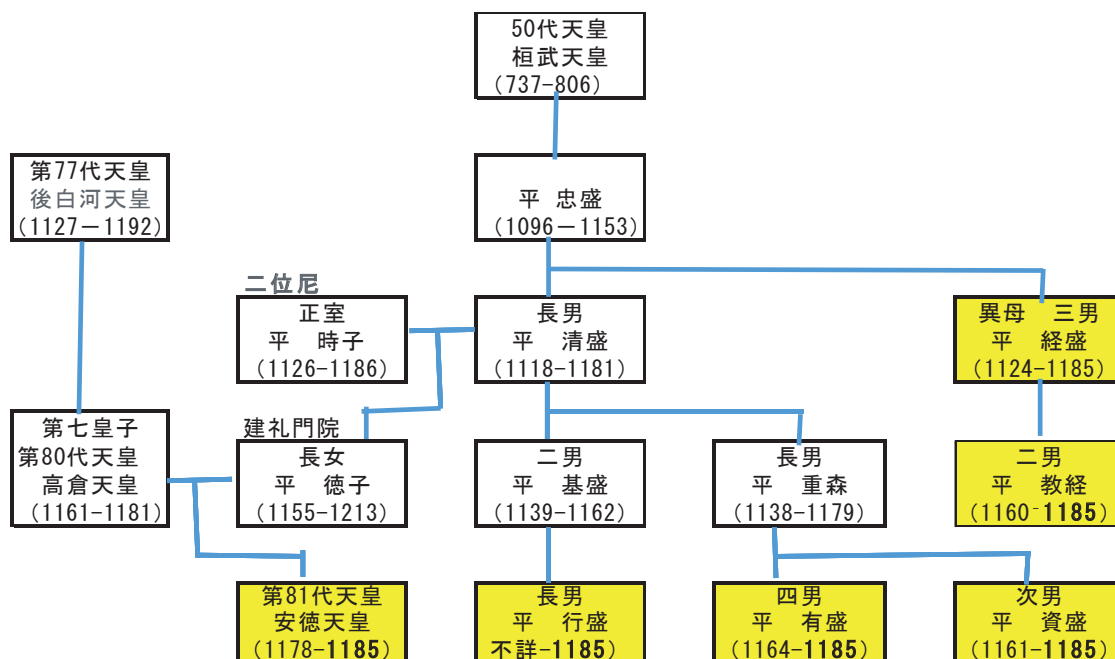


图1 栢武平氏系图（笔者作成）

いは、戦いが始まる前に鹿児島県の硫黄島（三島村）に落ち延びたとする説などがある。

喜界島經由で奄美大島に来島したとされる平氏については『大奄美史』<sup>3)</sup>、『奄美大島物語』<sup>4)</sup>、『喜界町誌』<sup>5)</sup>、『三島村誌』<sup>6)</sup>に記述され、その来島の痕跡が当該地に残り、神社も設立されている。彼らについては、すでに『平氏落人と源為朝伝説の島—奄美大島歴史深訪(1)』<sup>7)</sup>及び『奄美大島歴史深訪(2)—島民を苦悩させたサトウキビと家人(ヤンチュ)制度、そしてケンムン伝説—』<sup>8)</sup>で報告したが、十分に足跡を辿って検証していない。さらに安徳天皇の生存説はいくつかの場所で伝えられる。筆者も小学校時代に鹿児島県十島村に安徳天皇の子孫だという高齢の方が住んでいると聞いたことがある。その時、疑問に思えば訪問して直に確かめることができたと思うがいまさらである。

加えて『平家物語』の最後には建礼門院について語られる。子供を失った母親の心情になると寂光院でのわび住まいが何か物悲しい。そこで、本論では、『平家物語』を中心に『吾妻鏡』<sup>9)</sup>で裏づけをしつつ、栄華を極めた清盛の人物像及びその影響をまともに受け、逃亡の果てに奄美大島に来島したとされる平氏公達の足跡を辿って改めて高知県馬路村、越知町の横倉山、硫黄島、喜界島の実地調査も含めながら論述することとした。

## I. 平家物語にみる清盛そして娘徳子と孫の安徳天皇

### 1. 平清盛

清盛は伊勢平氏の棟梁である平忠盛（1096-1153）の嫡男として生まれた。但し、『平家物語』では清盛の出自として、後白河法皇（1127-1192）の寵愛を受けて懐妊した祇園女御（生没不詳）が忠盛に下賜され、“男であれば忠盛の子として育てよ、女であれば引き取る”と言われたそうだが、男であったために忠盛が自身の子供として育てたとする説もある<sup>10)</sup>。

もう一つの出自説は、清盛は、天台宗の座主慈恵僧正（912-985）の再誕であるとの言い伝えである。『平家物語』の「慈心房」<sup>11)</sup>にこの辺りの事が記述されている。「慈心房」によれば、摂津の国清澄寺という山寺の住僧で慈心房尊恵は、法華経を信仰し、長い年月、この寺で仏道を求めていたので多くの人々が帰依していた。ある夜、法華経を読誦していたところ、閻魔大王の使いの者だという老人が現れた。その老人の案内に従って閻魔王宮に行き、大王に自分が死後どこに行くのか知りたいと尋ねると閻魔大王は尊恵を哀れみ、強化して様々な偈（げ）を唱え、帰ったらこの偈文を清盛入道に献上せよと言った。

偈文には、「妻子も王位も財宝、親族や従者たちも死ねば一つとしてその身に伴い従ってくるものではない。生前に犯した悪行が鬼となってつねに従い、その身を苦しめ、限りなく喚き叫ばせるばかりである。再誕の最初、將軍の身として現れ、悪行の恐ろしさを衆生に教え、大僧正と同じく利益を与えられた。」<sup>12)</sup>と書かれていた。閻魔王宮から帰った後、尊恵がこの偈文を清盛に差し上げると清盛はこの上なく喜んだ。ゆえに清盛は、最終的に悪行の恐ろしさを、身をもって衆生に教える役割を担ったことで、慈恵大僧正の再誕であるという説である。

という事で忠盛の実子説、後白河法皇の庶子、慈恵入道の再誕という3つの出自説を持つ清盛は、1146年（久安2年）に安芸守（現在の広島県知事位の役職）に任じられた。安芸守清盛は、瀬戸内海の制海権を手にする事で莫大な利益をあげ、父忠盛と共に西国へと勢力を拡大した。またその頃より宮島の厳島神社を信仰するようになった。清盛が厳島神社信仰を強くした理由は、神託にしたがって、厳島神社の造営を行い、栄華を賜ったことによる。清盛は安芸守の任にあった時、高野山の大塔を修理せよとの命を受け、六年かけて修理を行った。修理が終わった後、清盛が高野山に登り、大塔を拝礼して奥の院に参った時に、眉は霜のように白く、額には波のような皺のよった老僧が二またのかせ杖にすがって出て来て、「この山は真言密教の仏法を伝えて衰退したことがない。ところで、安芸の厳島と越前の氣比の宮は、金剛、胎藏両界の垂迹であり、氣比の宮は栄えているが、厳島はすっかり荒れ果てて、ないも同様の有様。このついでに奏上して修理してください。」<sup>13)</sup>と言って立ち去った。清盛は都に戻って院（鳥羽法皇）にこのことを報告すると、院も感動されて安芸守の任期を延長されて厳島の修理を命じた。鳥居を建て替え、社々を造りかえ、百八十間の回廊を造った。修理が終わった後、厳島に参詣し、通夜せられたとき、夢に御室殿の内から髪をびんずらに結った天童が出てきて、「これは大明神の御使いである。汝はこの剣をもって天下を鎮め、朝廷の御守りとなれ」と言って銀の蛭巻きをした小長刀を賜った。夢から覚めて観ると枕元に小長刀があった。加えてご神託があり、「汝は知っているか、忘れたか、ある聖をもって言わせたことを、しかし、悪行があればその栄華も子孫までは及ばぬぞ」と言って帰った。ある聖とは、高野山の老僧の事である。清盛はお告げにしたがって、厳島神社の造営を行い、篤く信仰した<sup>14)</sup>。

1153年（仁平3年）、忠盛の死によって、清盛が平氏一門の棟梁となった。“保元の乱”、“平治の乱”で清盛は、平氏一門の結束に努め、後白河天皇側（1127-1192）について戦い、勝利をもたらした。後白河天皇と平氏との協力体制は磐石なものに見えたが、後述する“殿下乗合事件”をはじめとして多くの仏閣・神社信徒らとの対立などから徐々に両者の溝が深まった。また、第78代二条天皇（1143-1165）は在世中に親政を行おうとして後白河法皇と対立し、二条天皇によって院政停止状態に置かれていた。二条天皇は後白河天皇の長男であり、二条天皇が崩御すると、その死後は、二条天皇の息子でわずか5歳（満3歳）の六条天皇（1164-1176）が第79代天皇に即位した。

1168年（仁安3年）、政治の実権を奪われていた後白河法皇が、清盛と手を結んで六条天皇を退位させ、叔父の高倉天皇（1161-1181）を第80代天皇にするという不自然な皇位継承を実現させた。高倉天皇は、後白河天皇の第7皇子で母親は皇太后建春門院（1142-1176）で、名を平滋子と言う。彼女は、清盛の妻、平時子（1126-1185）の異母妹で二位尼（にいのあま）として知られる。ゆえに、高倉天皇は、政界の実力者である清盛の義理の甥にあたる。高倉天皇は、1172年（承安2年）に清盛と時子の娘で自身にとっても従姉に当たる徳子を中宮に迎えていた。1176年（安元2年）に建春門院が死亡したのを契機に、後白河法皇は清盛との対立をさらに深めた。

1177年（安元3年）清盛の専横によって、左大臣に清盛の長男平重盛（1138-1179）が、右大臣に、三男平宗盛（1147-1185）が着任した。その事を恨んだ新大納言藤原成親（1138-1178）は、人のいない場所に武器を準備し、平氏を滅ぼす企てを進めることに専心した<sup>15)</sup>。ここに加わったのは後白河院の寵臣であった西光法師（不詳-1177）や、後白河法皇の側近で法勝寺執行の地位にあった俊寛（1143-1179）達であった。彼らは平氏打倒の目的で鹿ヶ谷の俊寛の山荘で密議を行った。彼らは多田行綱（生没年不詳）が反平氏軍の大將になることを期待した。しかし、計画の無謀さと平氏の勢力に恐れを成した行綱の密告により陰謀が露見し、西光法師は、清盛のもとに連行された。西光法師は悪びれた様子もなく清盛に悪口雑言を吐いた。その為、清盛は西光法師を厳しく拷問した後に口を割き、五条西朱雀で切り殺した。



俊寛は、成親の長男丹波少将藤原成経（1156-1202）や判官平康頼（生没年不詳）と共に鬼界ヶ島に流された<sup>16)</sup>。流された3人は、成経の舅から送られる衣食で毎日をしのいだ。俊寛は無信仰であったが、熊野信仰のある二人は島の中で、熊野に似たところはないかと探索したりしてした。そのうち、日数も重なって、着替える服もなくなり麻の衣に身をまとい、沢辺の水を岩田川の清流と思って、水垢離（みずごり）にくみ、高い所にのぼっては、そこを本宮の発心門になぞらえたりした<sup>17)</sup>。“水垢離”とは神仏に祈願するため、冷水を浴びて身体を穢れを、払い身を清めることを言う。その後、高倉天皇皇后の出産に伴う慶事により罪人の恩赦があり、成経と康頼は赦免されたが俊寛にはその沙汰がなく、一人、島に残された。

後白河法皇と清盛との関係は、鹿ヶ谷の陰謀により危機的状況になったが、この時は清盛も首謀者の成親・西光の処刑と参加者の配流にとどめ、後白河自身の責任は問わなかった。後白河法皇も表面は清盛との友好関係を修復することにつとめ、両者の対立は緩和されたかに見えた。

1178年（治承2年）11月に中宮・徳子が高倉天皇の第一皇子を出産、名は言仁（ときひと）と称した。同年12月には皇子を早々に皇太子とした。清盛が皇子を皇太子にすることを後白河法皇に迫ったためである。1179年（治承3年）11月に清盛は、後白河法皇を幽閉すると同時に関白の松殿基房（1144-1230）を追放した。加えて後白河天皇第三皇子の以仁王（もちひとおう 1150-1180）も長年知行してきた城興寺領を没収された。1180年（治承4年）2月21日に数え年3歳（満1歳2か月）の皇子を踐祚（せんそ）、4月には早くも第81代天皇に即位させた。「厳島御幸」<sup>18)</sup>によれば、1180年（治承4年）、正月に東宮の御袴着、ならびに御真実魚始めのめでたい儀式が執り行われたが、法王はよそごとのように聞いていた。同年2月、清盛は、高倉天皇を皇位から下ろし、3歳の東宮言仁を皇位につけたのである。幼帝の政治の補佐は外祖父の清盛が取り仕切った。この一連の過程は清盛がすべて思いのままにしたことであった。“あー、恐ろしいことだ”と人々は非難した。

同年4月、ついに平氏討伐を決意した以仁王は、源頼政（1106-1180）の勧めに従って、平氏追討の令旨を全国に雌伏（しふく）する源氏に発し、平氏打倒の挙兵・武装蜂起を促した。しかし、準備が整わないうちに計画が平氏方に漏れた、平氏の圧力による勅命と院宣で以仁王は皇族籍を剥奪され、土佐国への配流が決まった。その日の夜、検非違使の土岐光長（源光長 不詳-1184）と頼政の養子源兼綱（不詳-1180）が以仁王の館を襲撃したが、以仁王はすでに脱出していた。以仁王が園城寺に逃れていることが判明し、平氏は園城寺への攻撃を決定した。頼政はその日のうちに子息たちを率いて園城寺に入り以仁王と合流した。しかし園城寺と対立していた延暦寺の協力を得ることができなかった。また園城寺内でも親平氏派が少なくなく、このままでは勝ち目が薄いと判断した以仁王と頼政は、南都の寺院勢力を頼ることに決めた。同年5月、頼政が宇治で防戦して時間を稼いでいる間に以仁王は興福寺へ向かったが、同日中に追討軍に追いつかれて討たれた。同年5月、以仁王を引き受けた三井寺や興福寺に対し、朝敵とみなした清盛は、5男の頭中（とうの）中将平重衡（1158-1185）を大將軍に、副將軍に薩摩守忠度（1144-1184）の軍勢併せて万余騎で攻めた。平氏軍に対し、三井寺側でも応戦したが、夜になって火が放たれ、たちまち火が燃え広がり、三井寺は炎上した。この清盛の勢力の伸張に対して、後白河法皇をはじめとする院政勢力は次第に不快感を持つようになった。寺社勢力、特に園城寺と同じ天台宗で親平氏の延暦寺でも反平氏勢力の動きがあった。

そこで、清盛は有力寺社に囲まれて平氏にとって地勢的に不利な京都を放棄し、一門の反対を押し切り、平氏の拠点である大輪田泊（現在の兵庫県神戸市和田岬付近）を臨む福原という地への遷都を目指した。清盛は福原行幸を強行した後、福原遷都を実行した。福原遷都の理由は、奈良に近い京都は比叡山に近く、些細な事につけても、春日神社の神輿などを先だてて、大衆らが騒動を起こしてくる。福原は山をへだて、いくつもの川にさえぎられて、距離も遠く離れているので、このようなことは容易にできまいと清盛が考えたことによる。ようするに、寺社の反平氏の動きは活発で、三井寺と興福寺に挟まれた京都は政治的・戦略的な意味があったのか。以仁王自身の平氏追討計画は失敗に終わったが、彼の令旨を受けて源頼朝（1147-1199）や木曾義仲（1154-1184）など各地の源氏が挙兵し、これが平氏滅亡の糸口となった。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも元の水にあえらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまるためしなし。世中にある人と栖と、またかくのごとし。」<sup>19)</sup>に始まる『方丈記』<sup>20)</sup>には、福原遷都後の京の状態を以下のように描写している。



「期する所なき者は、憂へながらとどまりける。軒を争いし人のすみひ、日を経つ々荒れゆく。家はこぼたれて淀河に浮び、地は目の前に畠となる。人の心はみな改まりてただ馬鞍のみ重くす。牛車を用する人なし。」<sup>21)</sup>

長明が住まいは川原の近く、その住まいの有様について広さはわずかに方丈、高さは七尺がうち也。方丈とは一丈(約三メートル)四方の事であり、狭い住家である。ここを住家にして随筆を書いたから『方丈記』なのか。いずれにしても福原遷都後の京都は大火あり、地震ありと悲惨な状況であったようだ。

平氏の悪行はここで、その頂点に達した。人々は、「去る安元年間よりこのかた、多くの公卿、殿上人を、あるいは流刑にし、あるいは殺害し、関白をお流しして自分の婿を関白にし、法王を鳥羽の離宮にお遷し申し、第二皇子の高倉宮をお討ちして、いま、つみかさねてきた悪行の最後としての遷都である」<sup>22)</sup>と清盛の横暴について語りあった。高倉宮の住人は以仁王であるが、彼は後白河法皇の第三皇子である。福原遷都については、比叡山の延暦寺や奈良の興福寺や諸寺諸社に不当な事であると訴えられ、清盛は同年12月には京都に戻ることを決意した。興福寺では、鞠討ち(ぎっちょう)の球をつくって、これを清盛の頭と名づけ、“打て”“踏め”などと言った。解説によれば、興福寺の衆徒は1179年(治承3年)に清盛によって追放された前関白基房の帰郷を要求して蜂起したりしていた。前関白基房と言うのは、藤原基房(松殿基房 1144-1231)であり、清盛が“殿下乗合事件”で対決したことで有名である。“殿下乗合事件”とは、1170年(嘉応2年)基房の一行が女車に乗った資盛に遭遇し、資盛が下馬の礼をとらないことに怒った基房の従者達が資盛を馬上から引き摺り下ろして恥辱を与えた事件である。その後、これに怒った清盛は、基房の髻を切って資盛が恥をすすげと片田舎の強者どもに命令した。天皇の元服、加冠の為に改まった衣装で参内した基房の牛車は六波羅の甲冑した武士たち300余騎に襲われ、狼藉を受けた。1179年(治承3年)の政変で、基房は摂関家領を奪われた上に、“殿下乗合事件”に巻き込まれたこともあり、反平氏勢力の急先鋒となっていた。清盛の怒りは基房に向けられ、基房は大宰権帥に左遷の上で配流された。この基房の帰郷を求めての暴動である。

清盛は、奈良の宗徒を鎮めようと備中国の住人瀬尾太郎兼康(1123-1183)を検非違使に任せ、“宗徒が乱暴するようなことがあっても、おまえたちはけっしてしてはならない。鎧・兜などを身につけるな、弓矢も持ってはならぬ”と命じてさし遣わしたが、これを知らない大衆は兼康の軍勢のうち60余人を捉え、一人一人首を斬り、猿沢の池のほとりにかけならべた。

このことを聞いた清盛は激しく怒って、4万騎の兵を奈良にさし向けた。大衆も刀で応戦し、勇猛に闘った者もいたが、最後にはみな討たれてしまった。夜になってあたりの民家に火がつけられた。激しい風の吹く夜であったので、火はたちまち燃え広がった。「恥をわきまえ、名誉を重んじるほどの者は、奈良坂で討ち死にし、般若寺で討たれてしまった。歩ける者は、吉野、十津川の方へ落ちのびた。歩くこともできない老僧や仏道ひとすじの修学僧、稚児たちや女、子供は、大仏殿の二階の上や、山階寺の内へわれさきに逃げこんだ。大仏殿の二階の上には、千余人がのぼり敵がつづいてくるのをのぼらせまいと、階段を取りはずしてしまった。そこに猛火がまっこうから押し寄せてきたのである。わめき叫ぶ声は、焦熱、大焦熱、無間阿鼻の地獄の、炎の底で責め苦をうける罪人も、これ以上ではあるまいと思われた。」<sup>23)</sup>この火事で興福寺と東大寺が焼け、焼け死んだ人の総計は三千五百余人、戦場で討たれた大衆は千余人であった。興福寺・東大寺など南都の諸寺を焼き払ったことにより、都周辺の反平氏勢力の動きは鎮静化したが、この南都焼討では数千もの民衆が犠牲となった。東大寺大仏殿と大仏を焼失、大破させる惨事となり、清盛自身も“仏敵”の汚名を着ることとなった。

1181年(治承5年)、頼朝が蜂起した。前右大将宗盛が源氏追討の為に出発寸前で清盛が発病し、出発を中止した。『平家物語』の「入道死去」<sup>24)</sup>で清盛は、「病付き給ひける日より、水をだにも喉へ入れ給はず。身中熱する事、火燃ゆるが如し。臥し給へる二、三間が中へ入る者、あつさ堪へ難ければ、近く有る者希也。宣ふ事とては、“あたあた”と計り也」<sup>25)</sup>と記述されている。つまり、清盛は、病についた日から水も飲めないようになり、体が火のように熱くなった。病室に入った者は熱さに耐えられないので、近くによる者もなかった。清盛はただ“熱い熱い”というばかりで発病したその時から水も飲めず体内の熱さは火を焚いているようで、臥床している四五間に入る者は熱さに耐えられない状態であったとの事。その為、「比叡山より千手井の水をくみだし、石の船にたたへて、それにおりてひえ給へば、水おび

ただしくわきあがって程なく湯にぞなりける。もしやたすかり給ふと笥の水まかせたれば、石やくろがねなどの焼けたるやうに、水ほどばしって寄りつかず、おのづからあたる水は、ほむらとなってもえければ、黒柱殿中にみちみちて、炎うづまいてあがりける。』<sup>26)</sup>

少々、オーバーであるかとも考えられる描写であるが、灼熱地獄のような高熱に苦しむ清盛の様子は、尋常ではなかった。二位尼は夢で、閻魔大王の使いが平氏太政入道殿を迎えにやって来て「南閻浮堤の金銅十六文の盧遮那仏を焼き滅ぼされた罪によって、無間地獄の底に落ちられることが、閻魔の庁において決定された」<sup>27)</sup>と言われた。清盛は、最後に自分が死んだ後は仏堂や塔を建ててはならない。ただ頼朝の首を刎ねて自分の墓に備えよと遺言を残し悶絶躰地して、遂にあつち死ぞし給ひけり。頼朝に情けをかけて伊豆への島流し程度にしたことが余ほど悔やまれたと見える。1181年（治承5年）清盛は死亡した。享年64であった。

清盛の死後、平氏の棟梁の座は3男の平宗盛（1147-1185）が継いだ。清盛の嫡男、平重盛（1138-1179）はすでに病死、次男の平基盛（1139-1162）も早世していた為である。「此一門にあらざらむ人は皆人非人なるべし」<sup>28)</sup>と語ったのは平時忠（1130-1189）であったそうだが、この言葉が示すとおり、誰もが平氏のゆかりの者になりたがった時代であった。しかし、後を継いだ宗盛には全国各地で相次ぐ反乱に対処する能力と権威が持てず、次第に追いつめられていった。

1180年（治承4年）、以仁王が全国に発した平氏打倒の命に応じて、いち早く挙兵したのは木曾の義仲である。義仲は1183年（寿永2年）、平氏打倒のため、京都に向かって進軍した。義仲は“倶利伽羅峠の戦い”で10万ともいわれる平維盛（1159-1184）率いる平氏の北陸追討軍を破り、続く加賀国での“篠原の戦い”にも勝利した。義仲の勝利に乗った沿道の武士たちを糾合し、破竹の勢いで京都を目指して進軍、頼朝に先んじて入京した。この戦いで義仲に敗れた平氏は都落ち後、“水島の戦い（倉敷市玉島）”、“六ヶ度合戦”、“屋島の戦い”で奮戦した。その後、引き起こされたのが“一の谷の戦い”である。“一の谷の戦い”は、1184年（治承3年）に摂津の国福原と須磨で行われた。源氏方は範頼と源義経（1159-1189）、平氏方は知盛や忠度が指揮官である。この戦いで義経は「坂落」<sup>29)</sup>という戦法で、一の谷の裏手の断崖絶壁の上から一気に崖を下って平氏の陣に突入した。知盛は必死に応戦したが、混乱した平氏は敗走した。

平家一門として17歳で“一ノ谷の戦い”に参加した平敦盛（1169-1184）は、源氏側の奇襲を受け、騎馬で海上の船に逃げようとしたが逃げ遅れた。敵将を探していた熊谷直実（1141-1207）が逃げようとしている敦盛を見つけ、“敵に後ろを見せるのは卑怯でありましょう、お戻りなされ”と呼び止めた。敦盛が取って返すと、直実は敦盛を馬から組み落とし、首を斬ろうと甲を上げると、我が子長男の直家（1169-1221）と同じ年頃の美しい若者の顔を見て躊躇した。直実は敦盛を助けようと名を尋ねるが、敦盛は“お前のためには良い敵だ、名乗らずとも首を取って人に尋ねよ。すみやかに首を取れ”と答え、直実は涙ながらに敦盛の首を切った。敦盛のこの一件について『平家物語』では、「敦盛最期」<sup>30)</sup>に詳しく記載している。“ああ、嵐の戦場で聞こえていたのは、この笛の音だったのか”と直実は無情を悟り、後に出家して高野山に登った<sup>31)</sup>。敦盛は横笛の名手として知られており、戦場でも名笛“青葉”を身に着け、その笛を吹いていたようだ。

この出来事を題材にして作られた歌が“青葉の笛”である。この歌は、1906年（明治39年）に発表され、尋常小学唱歌に採用されている。作詞は国文学者の大和田建樹（1857-1910）、作曲は音楽教育家の田村虎蔵（1873-1943）である。歌詞にある公達は敦盛を示しているとのこと。青葉の笛の歌詞は、「一の谷の軍（いくさ）破れ、討たれし平家の公達（きんだち）あわれ、暁（あかつき）寒き須磨の嵐に聞こえしはこれか青葉の笛」<sup>32)</sup>である。この歌そのものが哀愁漂う歌であるが、実際に調査をしてみても悲しい出来ごとであった。筆者も小学校の時に歌ったこの歌はかすかにしか覚えていなかったが、WEB検索により全文を記憶した。随分と歌い継がれたものだ。この後、平氏は“壇ノ浦の戦い”で壊滅状態に陥った。

## 2. 清盛の娘徳子（建礼門院）と安德天皇

清盛の娘徳子（1155-1214）は、日本の第80代天皇、高倉天皇の皇后で院号を建礼門院（けんれいもんいん）と言う。1178年（治承2年）11月、徳子と高倉天皇の間に男子が誕生、名は言仁（ときひと）と



称した。生後まもない12月に立太子され、1180年（治承4年）2月21日に数え年3歳（満1歳2か月）で践祚（せんそ）、4月22日には早くも第81代天皇に即位し安徳天皇と称した。践祚とは天子の位を授かることである。幼帝の政治の補佐は外祖父の清盛が取り仕切った。安徳天皇の即位は、かねてより清盛が計画していた福原遷都の年に行われた。

清盛の死後、平氏と後白河法皇の間には当初から解消することのできない対立が存在したが、かつては建春門院が調整役を果たしていた。建春門院は、第77代天皇後白河天皇の正室で高倉天皇の母（国母）で皇太后である。しかし周囲の状況は、以前とは大きく変化していた。各地では反乱の火の手が燃え盛り、後白河法皇も院政停止や幽閉等を経験し、平氏に不満を通り越して憎しみを抱いていた。夫を失い父も失った徳子には対立を抑える力はなく、政権の崩壊は目前に迫っていた。1183年（寿永2年）、義仲の入京に伴い、安徳天皇は、宗盛以下平氏一門に連れられ三種の神器とともに都落ちした。1183年（寿永2年）に三種の神器が無いまま後鳥羽天皇（1180-1239）が天皇の地位を受け継ぎ、1184年（元暦元年）に第82代天皇に即位した。正史上初めて同時に2人の天皇が擁立されることになった。平氏は“一ノ谷の戦い”と“屋島の戦い”に敗北、特に屋島合戦の敗北により、天皇と平氏一門は海上へ逃れた。そして1185年（寿永4年）4月、最期の決戦である“壇ノ浦の戦い”で平氏と源氏が激突したが、平氏軍は敗北し、一門は滅亡に至った。この際に安徳天皇は二位尼に抱かれて入水し、崩御したとされる。数えで8歳（満6歳）であった。母の建礼門院も入水したが、源氏方将兵に熊手に髪をかけられ引き上げられている。

『平家物語』の「先帝身投」<sup>33)</sup>の描写では、源氏の兵士たちが、すでに平氏の船に乗りうつってきて、水手梶取どもが射殺されたり、切り殺されたりして船の方向も変えることができず船底に倒れ伏してしまった。この有様をご覧になった二位尼は、最期を覚悟して神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、安徳天皇を抱き奉って「わが身は女なりとも、かたきの手にはかかるまじ、君の御供に参るなり、御心ざし思ひ給わん人々はいそぎつづき給え」<sup>34)</sup>と言って船端にあゆみ出た。抱き上げられた安徳天皇は、今年8歳であったが、年よりは大人びていて容姿は端麗であり、あたりも輝くほどであった。天皇は“尼ぜ、わたしをどこへ連れて行こうとするのか”と問いかける。二位尼は涙をおさえて“君は前世の修行によって天子としてお生まれになりましたが、悪縁に引かれ、御運はもはや尽きてしまわれました。この世は辛く厭わしいところですから、極楽浄土という結構なところにお連れ申すのです”と言い聞かせる。天皇は小さな手を合わせた。二位尼は“波の下にも都がございます”と慰め、安徳天皇を抱いたまま壇ノ浦の急流に身を投じたと記述されている。昔は、大臣、公卿たちに囲まれ平氏一門の人々にかしづかれておられたのに、今は船のうちにさすらひ、波の下に御命をたちまち滅ぼされたのは、まことに悲しいことであつたと締めくくられる。

壇ノ浦には現在、入水した安徳天皇を祀る赤間神宮（図2 山口県下関市阿弥陀町）がある。前身は阿弥陀堂で江戸時代までは安徳天皇御影堂といい、仏式により祀られていた。平家一門を祀る塚も近くにある。壇ノ浦の戦いで入水した安徳天皇の遺体は現場付近では発見できなかったが、1191年（建久2年）に勅命により御影堂が建立された。ここではやはり、安徳天皇は死亡したと認定されたのである。その後、明治の神仏分離により阿弥陀寺は廃され、神社となって“天皇社”と改称した。また、歴代天皇陵の治定の終了後、安徳天皇陵は多くの伝承地の中からこの安徳天皇社の境内が1889年（明治22年）“擬陵”として公式に治定され、1875年（明治8年）赤間宮に改称し、官幣中社（かんぺいちゅうしゃ）に列格したものである。売店の横の小さな建物内には源平合戦の様子を描いた立派な屏風（教経と義経の様子や敦盛と熊谷他、安徳天皇の御座船等が描かれる）にある安徳天皇と建礼門院、そして清盛、知盛、経盛等の掛け軸が陳列されている。また、同神宮には壇ノ浦で戦死した平家の霊を弔った平家塚（図4）がある。塚には本論で取り上げ、硫黄島や喜界島、奄美大島に来島したとされる重臣たちの名前がある。

『ある遺書―北摂能勢に残るもう一つの平家物語』<sup>35)</sup>は、藤原経房（1142-1200）が残したとされる遺書を中心に検証された著作である。経房は、平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての公卿藤原北家勧修寺流、権右中弁藤原光房（1109-1154）の子で、官位は正二位・権大納言、後に吉田経房と称した。彼は、後白河天皇の姉である上西門院や妃の建春門院の側近となる一方、第79代天皇の六条天皇、第80代高倉天皇の蔵人を務めた事から、清盛の知遇を得た。その後、平氏政権の実務官僚として、各弁官や内蔵頭を歴任、“治承三年の政変”直前の10月、参議に昇進した藤原光能（1132-1183）が病で倒れた為に、





図2 赤間神宮 (筆者撮影)



図3 赤間神宮説明

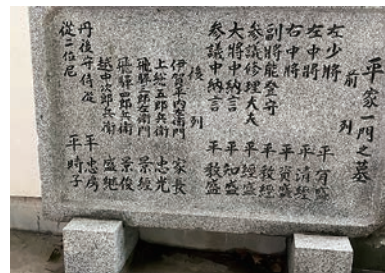


図4 平家塚 (筆者撮影)

その後任として蔵人頭となった。やがて安徳天皇が即位して高倉上皇が院政を開始すると、蔵人頭と新院の院別当を兼務した。“治承三年の政変”とは1179年（治承3年）11月、清盛が軍勢を率いて京都を制圧、後白河院政を停止した事件のことである。

同著によれば1185年（寿永4年）、3月24日朝、二位尼は密かに典侍（てんすけ）、大納言局佐、勾当内侍、阿波の内侍、右少将基道、われ経房（藤原経房のこと）、大輔判官種長、郡司影家を召され、安徳天皇と建礼門院の命を尽きさせるのは大変恐ろしいことであると言った。3月24日は“壇ノ浦の戦い”の火ぶたが切られた日である。典侍（てんすけ）とは、内侍所の次官の意味で大納言局佐は、清盛の五男平重衡（1158-1185）の妻となった藤原輔子（生没不詳）ではないかと推測されている<sup>36)</sup>。彼女は安徳天皇の乳母をつとめ、従三位典侍・大納言典侍（大納言佐）と称していたからである。そして、彼女は権大納言藤原邦綱（1122-1181）の次女である。夫の重衡は“壇ノ浦の戦い”の後、捕縛され、6月に木津川畔にて斬首、奈良坂にある般若寺門前で梟首（きょうしゅ）された。享年29であった。妻の輔子はうち捨てられていた重衡の遺骸を引き取り、南都大衆（だいにしゅ）から首も貰い受けて茶毘に付し、墓を建てた<sup>37)</sup>。勾当内侍（こうとうのないし）とは誰か。まず、内侍という役職は天皇に近侍して、常時天皇への奏上や、天皇からの宣下を仲介すること及び賢所（かしこどころ）を管理すること等を職掌とした内侍司の女官の総称であり、中でも一番上位にある者を勾当内侍という。賢所は、天皇が居住する宮中において、三種の神器の一つであり、天照大神の御霊代（神体）とする神鏡（八咫鏡）を祀る場所である。ここの管理をする者と言えば、誠に重要な職責を担う。この者が誰であったのかは同著では明らかにしていない。筆者はこの役職を担当していたのが阿波内侍ではなかったのかと考えたが、建礼門院と一緒に船に乗った人物は大納言局佐、阿波内侍、勾当内侍、少将基通と別々に記載されているから大納言局佐と阿波内侍は別人なのか。建礼門院に最後まで寄り添った阿波内侍という女性は、本人が後白河法皇に名乗ったことによれば、少納言入道信西（藤原通憲 1106-1160）の娘である。また、安徳天皇の船に同乗した人物は、源のすけ、経房、種長、影家の4名である。源のすけと言うのは、平氏公達（へいしこうだ）の妻とされるが明確にされていない。一番有力視されているのは重盛の嫡男維盛の妻である。彼女は、藤原成親（1138-1177）の次女で、建春門院新大納言（1160年-不詳）という。後に吉田経房の妻になった女性である。しかし、ここでは、安徳天皇と大海に沈んだ二位尼が乗船していない。然し、この後、安徳天皇生存説は高知県、硫黄島等に残っている。

内侍右少将基道は、安徳天皇の摂政藤原基通（1160-1232）で、大輔判官種長は原田種直（1140-1121）、郡司影家は藤原景家（生没不詳）の事であろうと推測されている。同著によれば、二位尼は皆平家の血筋でない者をお供させようと述べて、砂金をくれた<sup>38)</sup>。彼らは粗末な小舟に、身なりを整えて覚悟をして乗った。二位尼は知盛の次男に安徳天皇の衣を着せて入海した<sup>39)</sup>。但し、知盛の次男は、増盛（生没不詳）と言い、早くから出家している。平知忠（1180-1196）というのはその弟であり、三男であるとWEB上では記録される。同著で身代わりとなった知忠は“壇ノ浦の戦い”後、1195年（建久7年）までの10年間、都の法性寺（ほっしょうじ）のそばの一の橋というところに潜んでいた。しかし、鎌倉幕府にいち早く察知されて、知忠とその主従は、ことごとく討たれてしまったという。『吾妻鏡』にも知忠が1195年（建久7年）に京都法性寺に潜んでいたところを一条能保に派遣された軍勢に殺害されたとある<sup>40)</sup>。一条能保（1147-1197）は藤原北家中御門流の血筋であり当時の公卿である。

安徳天皇と一緒に海に沈んだとされる三種の神器探索のために頼朝はご祈祷を行ったり、厳島の神主

である安芸野介佐伯景弘（生没年不詳）に探索を依頼したりしたが発見されなかった<sup>41)</sup>。同年、同月、新帝が内侍所、神璽（しんじ）、宝剣なしで即位した<sup>42)</sup>。神璽とは、三種の神器の一つである八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）のことである。都では九郎判官義経が検非違使・五位尉（じょう）に任ぜられ、屋島では浜辺を吹く風も激しく、磯に打ち寄せる波も高かったので、敵軍の攻めて来ることはなく、商船の往来もまれであった。ゆえに、聞きたいと思う都のたよりもとだえ、早くも空がかきくもって、霰の降り落ちるころとなり、わびしさに消え入るような心地であった<sup>43)</sup>。

生き残った建礼門院は、宗盛や時忠らと京都に護送された。宗盛は斬首、時忠は配流となった。徳子は罪に問われることはなく、洛東の吉田の地に隠棲していた。『平家物語』の「女院出家」によれば「住み荒して年久しゅうなりにければ、庭には草ふかく、軒にはしのぶ茂れり。簾たえ閨あらはにて、雨風たまるべふもなし。花色々のほえども、主とたのむ人もなく、月はよなよなさしいれど、詠めてあかすぬしもなし。」<sup>44)</sup>と記載されている。そして、昔は玉を飾った立派な屋敷に住んで、錦の帳のうちに暮らしていたのに、誠においたわしいと語られる。建礼門院は1185年（文治元年）に髪をそって出家し、直如覚尼と名乗った。冷泉大納言隆房卿（1148-1209）と七条修理大夫信隆卿（1126-1179）の北の方は、人目をしのんでたずねてはいろいろと世話を焼いた。二人は、建礼門院に現在の場所が人目に付きやすいからと新たな場所を推薦した。建礼門院は、勧めに応じ「山里は物のさびしき事こそあるなれども、世の憂きよりは住みよかなるよりは」<sup>45)</sup>と述べて大原寂光院に入った。

1186年（文治2年）4月、後白河法皇が公卿の徳大寺実定（1139-1192）、花山院兼雅（藤原兼雅 1148-1200）や土御門通親（源通親 1149-1202）他、院御所の北側の守りを務める北面武士を伴に、お忍びで大原の閑居を訪ねてきた。法王が御庵室に入って障子を引き上げて観たら、一間には来迦の三尊、中尊の御手には五色の糸をかけ、左に普賢の画像、右には善導和尚ならびに先帝の御影、八幡の妙文、九帖の御書がおかれていた。庵は蘭麝（らんじゃ）の匂ひに引きかへて、香りの煙ぞ立ちのぼるような室内であった。蘭麝（らんじゃ）の匂ひとは麝香（じゃこう）の香りのことである。徳子は落魄した身を恥じらいながらも、泣く泣く法皇と対面して、「太政大臣清盛の娘として生まれ、国母となり、わたしの栄耀栄華は天上界にも及ぶまいと思っていましたが、やがて木曾義仲に攻められて都落ちし京を懐かしみ悲しみました。海上を流浪し、飢えと渇きに餓鬼道の苦しみを受けました。そして、壇ノ浦の戦いで二位尼は、極楽浄土とてめでたき所へ具しまいらせ侍らふぞと言うと先帝を抱いて海に沈み、その面影は忘れようとしても忘れられません。残った人々の叫びは地獄の罪人のようでした。」<sup>46)</sup>と語った。そして、捕えられ播磨国明石まで来たとき、わたしは夢で昔の内裏よりも立派な場所で先帝と一門の人々が礼儀を正して控えているのを見ました。“ここはどこでしょう”と尋ねると“竜宮城ですよ”と答えられました。“ここに苦しみはあるのでしょうか”と問いますと“竜畜経のなかにみえています。よくよく後世を弔ってください。”と申すを見て、夢がさめました。それで、わたしは経を読み、先帝をはじめ一門の菩提を弔い申していますとこれまでのことを話した。

法皇は“あなたは目前に六道を見たのでしょうか。珍しいことです。”と答えて涙を流した。やがて寂光院の鐘（図7）の音に、今日も暮れ、夕日も西に傾いたので法王は、涙を抑えてお帰りになった。清盛が本当に後白河法皇の息子であるとしたら建礼門院は孫にあたるわけだから、生死を分ける戦いの後の対面はさぞかし格別な思いであったろう。壇ノ浦で捕虜になった平氏の武将達は都大路を引き回されて首をはねられた。「是はただ、入道相国、一天四海を拳にぎって上は一人をもおそれず、下は万民をも顧みず、死罪流刑、思ふ様に行ひ、世をも人をも憚られざりしがいたす所なり。父君の罪業は、子孫にむくふといふ事、疑ひなしとぞみえたりける。」<sup>47)</sup>重衡の妻輔子は自身も出家して重衡の菩提を弔い、大原寂光院の建礼門院に仕えた。『平家物語』の終末の部分、大原御幸の巻で建礼門院とともに薪と炭を拾っているところを後白河法皇と出会った。そして、1191年（建久2年）建礼門院がその生涯を閉じた際、阿波内侍と共に彼女を看取った。

筆者は建礼門院を偲ぶ意味で彼女がその生涯を閉じた寂光院を訪問した。寂光院の隣に住まいにしていた庵があったが、不心得の者が放火したのか焼失したという。2000年（平成12年）5月9日の深夜のことだったそうだ。下図は京都寂光院を訪問した際に筆者が撮影したものである。中央の図6は京都寂光院でその左側に建礼門院の住まいであった庵跡があった（図5）。



図7は建礼門院のお墓、図8は寂光院の千年の松で切り株だけが残っており、その説明が図9である。建礼門院が後白河法皇に最後の別れを告げた場所が、千年の松の前であったとのこと、図10は祇園精舎の鐘である。いずれも物悲しい出来事である。

『吾妻鏡』には、1187年（文治3年）、頼朝は隠れ住んでいる建礼門院を宗盛が知行していた摂津国内の荘園を与えることに決定した<sup>48)</sup>と書かれているが、『平家物語』に見る限り、建礼門院がその地に移動した形跡はない。京都の柴漬けという漬物は最後まで寄り添った阿波内侍と建礼門院が開発したものだそうだ。



図5 建礼門院お住いの庵跡



図6 京都寂光院



図7 建礼門院の墓



図8 寂光院千年の松

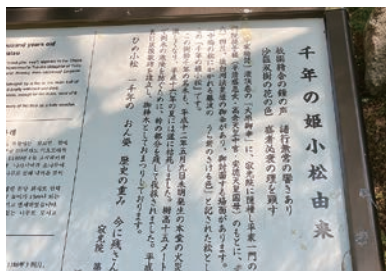


図9 千年の松のいわれ



図10 祇園精舎の鐘

## Ⅱ. 壇ノ浦で死亡したとされる平家公達とその後

### 1. 平資盛

平資盛は、清盛の嫡男重盛の次男であり、清盛の孫である。位階は従三位まで昇叙、新三位中将と称した。1166年（仁安元年）資盛は、兄平維盛（1159-1184）を差し置いて従五位下に叙爵され、12月には越前守となった。1169年（仁安4年）、正月には維盛とともに従五位上に昇進した。

先述した“殿下乗り合い事件”は1170年（嘉応2年）の出来事である。当事者である資盛は、この時13歳であったと『平家物語』には記載される<sup>49)</sup>が、1161年（永暦2年）に生まれたとしたら数え年でも10歳くらいであったろうか。資盛は、摂政基房の牛車と行き違った時に女車から降りず下馬の礼をとらなかった。このため、基房の家来と乱闘騒ぎを起こし、恥辱を受けて逃げ帰った資盛は、祖父の清盛にこのことを告げた。怒った清盛は、重盛が仲裁に入ったにも関わらず、資盛が恥をすすげと片田舎の強者どもに命令した為に天皇の元服、加冠の為に改まった衣装で参内した基房の牛車を六波羅の甲冑した武士たち300余騎に襲わせた。摂政関白がこのような目にあった本件が清盛悪行の始まりと平氏物語に記述される<sup>50)</sup>。

1177年（治承元年）の鹿ヶ谷の陰謀により後白河法皇と清盛の関係は危機的状況となったが、この時は清盛も首謀者の藤原成親、平康頼、西光の処刑と政変参加者の配流にとどめ、後白河自身の責任は問わなかった。後白河法皇も表面は清盛との友好関係を修復することにつとめ、両者の対立は緩和されたかに見えた。

1178年（治承2年）に、中宮徳子が高倉天皇の第一皇子を出産すると、清盛は皇子を皇太子にすることを後白河に迫り、12月、親王宣旨によって立太子された。皇太子の後見人・東宮傳（とうぐうのふ）に、



左大臣藤原経宗（1119-1189）が任じられ、春宮坊（皇太子の御所の政務を司る機関）は、宗盛他平氏一門や親平氏公卿で固められた。諸国の受領の大幅な交替も行われ、日本の知行国66か国の内、平氏の知行国は反乱前の17ヶ国から32ヶ国に増えた<sup>51)</sup>。皇太子周辺から後白河法皇近臣は排除され、後白河は平氏に対して不満と警戒を強めた。基房は摂関家領を奪われた上に、殿下乗合事件に巻き込まれたこともあり、反平氏勢力の急先鋒となっていた。1179年（治承3年）11月に清盛は数千騎の大軍を擁して福原から上洛、八条殿に入った。

父親の重盛が死去すると、叔父の宗盛が棟梁となった。“治承三年の政変”では、多くの院近臣が解官される中で、資盛はその地位を保った。1180年（治承4年）12月の美濃源氏の挙兵では、叔父の知盛とともに近江国へ出陣して反乱軍の鎮圧にあたった。

1181年（養和元年）、清盛が死去すると後白河法皇（1127-1192）が復権した。後白河法皇にとって清盛の死は、絶えず存在した重圧からの解放だった。資盛は後白河法皇のもとでもかわらず重用され、同年中には右近衛権中將、正四位下に昇進した。その後、後白河法皇は平氏追討の宣旨を下し、平氏は義仲との戦いに敗れ、敗走した。

1184年（寿永3年）正月、屋島に拠点を置いて一時勢力を回復した平氏は、摂津国福原まで進出した。しかし、同年、正月末に義仲を滅ぼした頼朝の代官範頼（1150-1183）、義経の軍勢が平氏追討に向かった。資盛は弟の有盛（1164-1185）、師盛（1167?-1184）らと七千余騎を率いて播磨国三草山に陣を置いた。が、義経軍の夜襲を受け、讃岐国屋島へ敗走した<sup>52)</sup>。その直後の2月、“一ノ谷の戦い”で平氏は一門の多くを失う大敗を喫した。資盛の弟の師盛はこの時に討死した。また兄の維盛はこの頃一門から離脱し、那智勝浦で入水自殺を遂げた。また弟の平忠房（不詳-1186）も維盛の戦線離脱の際に同行していたと見られる。『平家物語』では、重盛の6男忠房は平家が屋島の戦いで敗れた後、ひそかに陣を抜け出し、紀伊国の湯浅城城主湯浅宗重（生没不詳）の庇護を受けて同地に潜伏した。頼朝の追討を受け、宗重や藤原景清（不詳-1196）ら平家の残党が忠房の元に集い、籠城して徹底抗戦した。が、頼朝の偽りの誘いを受けて降伏し、鎌倉に出頭した。忠房は、頼朝に面会した後、京に送還されたが、その途上で斬られた。

同年9月、源氏方の範頼は、平氏追討のために西国へ向い、都合三万余騎で都を発って播磨の室に到着した。平氏方は大將軍小松の少将新三位中將資盛、同少将有盛など五百余と一艘の兵船で備前の国西河尻、藤戸に陣を敷いた。しかし、資盛はこの“藤戸の戦い”で範頼と戦い敗北した。1185年（元暦2年）、平氏は“壇ノ浦の戦い”で敗れ、資盛は有盛と、従兄弟の行盛と共に壇ノ浦の急流に身を投じて自害したとされる。享年28歳とある。しかし、ここでは終わらない。その後、資盛は有盛、行盛と共に硫黄島、喜界島経由で奄美大島に渡り、その地で没したことになる。図11は加計呂麻島諸鈍に残る資盛神社（大屯神社）である。大屯神社についての説明文には、諸鈍という地名は、壇ノ浦で敗れた平家の大将が、“諸君、源氏もここまでは追ってくるまい。ここでどんより暮らそうぞ”と言ったことから諸鈍と名づけられたという。



図11 加計呂麻島諸鈍にある資盛神社（大屯神社）（筆者撮影）

## 2. 平行盛

平行盛は、清盛の次男基盛の長男であり、資盛とは従妹同士である。父の基盛は1162年（応保2年）に24歳で早世したが、平氏一門の栄達にともない行盛は、1178年（治承2年）に叔父の宗盛の知行国の播磨守となり、翌年の1179年（治承3年）には、清盛の5男で叔父の重衡（1157-1185）の後任として、左馬頭になり正五位下に昇叙した。行盛は歌人として有名な藤原定家（1162-1241）に師事し、歌人としても名を上げた。行盛は、都落ちの際に自身の詠草を定家に託し、その包み紙に書かれた和歌は後に『新勅撰和歌集』に入集された。『『新勅撰和歌集』と後鳥羽院一雑歌を中心として』<sup>53)</sup>によれば、『新勅撰和歌集』巻第十七雑歌二に、次のような詞書を持つ歌が掲載されているとのこと。また、行盛は1183年（寿永2年）、おほかたの世しづかならず侍しころ、よみをきて侍ける歌を、定家がもといつかはすとて、つつみがみにかきつけ侍しと自著して、「ながれての名だにもとまれゆくみづのあはれはかなき身はきえぬとも」という歌を定家に送ったようである。

“治承・寿永の乱（じしょう・じゅえいのらん）”で行盛は、“俱利伽羅峠（越中・加賀国の国境にある砺波山の俱利伽羅峠）の戦い”で総大将維盛と共に、義仲と戦ったが、壊滅的な敗北を喫した。“治承・寿永の乱”は、1180年（治承4年）から1185年（元暦2年）までの6年間にわたる国内各地の内乱である。最終的には、“壇ノ浦の戦い”で決着をみる。

義仲に敗れた平氏は安徳天皇と三種の神器を奉じて都を落ち、九州大宰府まで逃れたが、在地の武士たちが抵抗してここからも追われてしまった。平氏はしばらく船で流浪していたが、同年9月、阿波国の田口成良（生没不詳）に迎えられて讃岐国屋島に本拠を置くことができた。成良は奈良の豪族紀氏の流れを汲み、810年（弘仁元年前後）に阿波守に就任した平安時代の貴族田口息継（生没不詳）の後裔とされ、四国の最大勢力で、阿波国や讃岐国に勢力を張っていた。彼は、早い時期から清盛に仕え、平氏の有力家人として清盛の信任が厚かった。宗盛は郡司に内裏の造営を命じ、完成するまでの間、六万寺を安徳天皇の行宮所と定めた。行盛は屋島での暮らしの中で「君すめばこれも雲井の月なれどなほこひしきはみやこなりけり」<sup>54)</sup>と読んだ。

1184年（寿永3年）1月、鎌倉の頼朝と義仲の抗争が起き、義仲は“宇治川の戦い”で滅びた。その間に平氏は義仲に奪われた失地を回復し、勢力を立て直して摂津国福原まで進出した。しかし、“一ノ谷の戦い”で頼朝の弟の範頼、義経に攻められて大敗を喫した。“一ノ谷の戦い”は、1184年（寿永3年／治承8年）2月、摂津国福原および須磨で行われた戦いで、源氏方は義経、範頼、平氏方は知盛、宗盛、清盛の異母弟平忠度（1144-1184）、清盛の5男重衡、清盛の異母弟の教盛（1128-1185）が長男平教経（1160-1185）である。この戦いでも平氏は破れ、更に西に敗走した。『吾妻鏡』には、1184年（元暦元年）12月に、平氏の一族佐馬守行盛朝臣が5百余騎の軍兵を率いて、備前の国児島に城郭を構えたので佐々木三郎盛綱（1151-不詳）が、頼朝の御使として、攻め落とすために向かったと記述される<sup>55)</sup>。これを“藤戸の戦い”という。“藤戸の戦い”は1184年（寿永3年／元暦元年）10月、備前国児島の藤戸と呼ばれる海峡（現在の岡山県倉敷市藤戸）で、源義朝（1123-1160）の六男範頼率いる平氏追討軍と、平氏の総大将の行盛軍の間で行われた戦いである。備前国児島に城郭を構えた行盛軍に対して、範頼軍は備前備中国境の藤戸の渡に陣を引いたが、船を平氏方に取られたために渡海できなかった。佐々木盛綱（生没不詳）は、単騎で海岸に出て浦人から浅瀬を尋ね、翌26日朝、盛綱は先頭に立って浅瀬を渡り、範頼軍はこれに続いて渡った。これにより行盛軍は敗退し屋島に退却した。

この後に起きた“屋島の戦い”は1185年（文治元年）3月に、源氏との間に起きた戦いで、平氏の総大将は清盛の三男宗盛、源氏方は義経である。敗走した平氏方は再び屋島に本拠を置き、知盛を大将に長門国彦島にも拠点置いた。平氏はこの拠点に有力な水軍を擁して瀬戸内海の制海権を握り、諸国からの貢納を押さえ力を蓄えた。一方の鎌倉方は水軍を保有していなかったため、どうしても彦島・四国攻めに踏み切れず、休戦が続いた。その後に起きた“壇ノ浦の戦い”で平氏は壊滅的な敗北をし、滅亡した。『吾妻鏡』には1185年（文治元年）4月11日付けで、頼朝が飛脚便を受け、その中に先帝（安徳天皇）他入海した人物に二位尼上、門脇中納言平矩盛、新中納言平知盛、平宰相経盛、新三位中将資盛、小松少将有盛、佐馬の守行盛の名前が挙がり、無事にお救い申し上げた人として若宮（守貞王）と建礼門院、生け捕りになった人物として宗盛他の氏名が列挙されている<sup>56)</sup>。守貞王（1179-1223）は高倉天皇の子で



安徳天皇の異母弟にあたる。しかし、彼らはここでは死亡していない。硫黄島、喜界島経由で奄美大島迄来島した痕跡があるからである。現在、奄美大島に平行盛神社がある（図12）。設置は第11代笠利為寿（佐都 1653-1716）である。



図12 行盛神社



図13 行盛の墓



図14 今井大権現神社



図15 蒲生崎から見た入り江と今井崎



図16 蒲生崎神社

為寿は1690年（元禄3年）に切腹して果てた行盛他の兵士たちを弔う意味で、行盛神社（図12）を建立、神社の裏手の方に昇ると行盛の墓（図13）がある。墓を見ても行盛がいつの時点で逝去したのか確認はできない。1692年（元禄5年）に為寿は、今井権現宮も寄進した。今井権現宮については『平氏落人と源為朝伝説の島－奄美大島歴史深訪（1）』<sup>57)</sup>で既に報告したが、奄美大島に落ち延びた平家三将のひとり行盛は龍郷の戸口に城を築き、源氏の追っ手を恐れ、奄美市笠利町蒲生崎（図15）に蒲生佐衛門が源氏警戒のため配された。図16は蒲生佐衛門を弔う為に設置された蒲生崎神社である。そして、今井崎は今井権太夫に見張りをさせ、決められた日ごとに戸口への連絡を送らせていた。しかし、権太夫は女性にうつつを抜き報告が遅れてしまったため、戸口では来るべき連絡が来ないことから源氏が攻めてきたと思い全員が自害した。後にそれを知った権太夫も自害したと言われ、その今井権太夫を祀ったのが今井大権現神社（図14）である。

### 3. 平有盛

平有盛は、重盛の四男で清盛の直系の孫にあたる。清盛が死亡してから50日も経っていない1181年（治承5年）に、源氏の一軍が尾張の国までやってきて道を塞ぎ、人を通さないという事が起きて、小松の少将有盛は、大將軍の左平衛守知盛等総勢三万騎で出陣した。この戦いで平氏は優勢であったが、知盛が病気になって帰還してしまったために大した戦果も出せなかった。この後、東国の方では草も木も源氏になびく有様になった。

1184年（治承8年／寿永3年）3月、有盛は異母兄の資盛に従い、“三草山（みくさやま）の戦い”に参戦した。“三草山の戦い”は播磨国の三草山における義経軍と資盛軍による戦いであり、“一ノ谷の戦い”の前哨戦と言われる。この戦いで義経に敗れた後、有盛は、屋島の平氏本陣に落ち延びた。最後は“壇ノ浦の戦い”において、劣勢になった平氏の武士たちが次々と入水していく中で、有盛は兄の資盛、従兄の行盛と三名で手を取り合い、海中に身を投じたとされる。しかし、彼らはここで終わっていない。

『三島村誌』<sup>58)</sup>によれば、先の屋島敗戦によって平氏は最高指揮者の知盛を中心に手分けを行い、第一



軍は、資盛を大将に安徳天皇を擁して日向灘を目指した。これには大納言時房、中納言経正、参議業盛、淡路の守清房など雑兵含め総計1,360余人、船は70余艘である。第二軍は資盛の代理として新従三位能宗を中將として筑紫・長州辺に、これに大納言時忠、従三位宰相季房、四位佐中將清経他雑兵併せて1,480余人が移動した。第三軍の中には、有盛も含まれ、征夷大將軍知盛を大将に、従一位太政大臣兼内大臣宗盛、正三位右衛門督清宗、や経盛、教経、経盛、二位尼、建礼門院等8,900余人と共に屋島在陣本隊として残っている。ここで壇ノ浦で入海した安徳天皇の身代わりは総君（つなぎみ）と言って時房の娘で、当時7歳であったが、これを男子として清宗の養子の形式をとったという。清宗は宗盛の長男であり、清盛の孫にあたる。本陣は壊滅したと書かれているが、この時、安徳天皇に同行して高知県の横倉山に落ち延びた武将たちの中に有盛の名前は確かにある。しかし、有盛の子平盛時（生没不詳）は壇ノ浦での敗戦後、家臣に助けられてひそかに小舟で平島（鹿児島県十島村の一つ）に入った。有盛は豊後のあたりに潜んでいたが、後に平島に入島した。しかし、島の大きさから将来の食糧難を考え、盛時を残して中の島（鹿児島県十島村の一つ）に移動した。平島の盛時の子孫は日高広氏という<sup>59)</sup>。そして、有盛と行盛は、熊野神社大宮前に石の鳥居を設置するにあたり、その原石を探しに来た福原右馬介季利と菊池二郎行吉兩名と豊後の国で出会った。彼らが豊後に来た目的を話すと有盛・行盛兩名は原石探しに協力した後硫黄島に同行、安徳天皇に拝謁した。その後、資盛が瑯琊（やな）国（奄美大島・琉球）に向かったことを聞いたので彼の後を追って1203年（建仁3年）に有盛は平島から中之島経由で、行盛は直接奄美大島に南下したとある<sup>60)</sup>。

然し、別な伝承も在り、彼らは喜界島で資盛と合流し、戦略を練ったうえで兄の資盛、従兄の行盛共々奄美大島に来島したとされる。名瀬市浦上に有盛神社（図17）と有盛の墓（図18）がある。



図17 有盛神社（筆者撮影）



図18 平有盛のお墓（筆者撮影）

#### 4. 平教経

平教経は、清盛の異母弟の教盛の次男であり、清盛の甥にあたる。1179年（治承3年）に能登守に任ぜられた。『吾妻鏡』によれば能登守教経は、1184年（元暦元年）の“一の谷の戦い”で遠江守安田義定（1134-1194）に首を取られたとされるのだが<sup>61)</sup>。『平氏物語』では、数々の合戦において武勲を上げ、“たびたびの合戦で一度も不覚を取ったことはない”“王城一の強弓精兵”等と言われる平氏随一の猛将であり、義経の好敵手的存在として描かれる。

『平氏物語』における教経は、都落ちした後の“水島の戦い（倉敷市玉島）”では、先頭に立って奮戦、劣勢にある平氏の中でひとり気を吐いて闘った。“水島の戦い”とは義仲軍と平氏軍との間で行われた海戦である。当時、平氏軍の拠点は讃岐の屋島にあった。平氏を追討するため、義仲軍は都を出発して屋島方面へ進軍していったが、平氏軍は、よく装備された馬を同乗させており、その軍馬と共に海岸まで泳いで上陸した。この戦いで平氏は、軍船同士をつなぎ合わせ、船上に板を渡すことにより、陣を構築、平氏軍の弓兵による義仲軍への射撃によって平氏軍が勝利した。その後の“六ヶ度合戦”、“屋島の戦い”でも奮戦して源氏を苦しめた。

“六ヶ度合戦”というのは、教経が劣勢の平氏を支えるべく転戦した戦いである。1183年（寿永2年）、

平氏は摂津国福原まで再進出したが、西国各地では平氏に叛く動きが起きていた。平氏の足もとの四国でも阿波国、讃岐国の在庁官人が源氏に通じ、備前国下津井にいた教盛、教盛の長男通盛（1153-1184）、二男教経ら父子の陣へ兵船10余艘で攻めかかった。教経は「にくいやつ原かな。契りをたがえるとは許せん、一人残らず討ち取れ」<sup>62)</sup>と小舟10艘を率いて出撃して打ち破った。この戦いで四国の者たちは淡路島へ逃れ、この地の源氏を大将に城を構えて対抗しようとしたが教経らがこれを攻め、叛いた130余人を斬首した。次に、伊予国水軍の武将河野通信（1156-1223）が源氏に寝返ったとの噂があり、通盛、教経兄弟はこれを討とうとしたが、通信は沼田城（現在の三原市）に立て籠もった。教経らは屋島を発して沼田城を攻め、城主沼田次郎（生没不詳）は降参した。次に淡路国の住人安摩忠景（1156-1222）が叛き、大船2艘に兵糧と武具を積んで京へ向かったので、教経は小舟10艘で追撃して撃破し、忠景は和泉国へ逃げ延びた。紀伊国の園辺忠康（生没不詳）が忠景に合流して助けたが、教経はこれも打ち破り、200余人を斬った。次に、通信は豊後国の臼杵惟隆（生没不詳）、緒方惟義（生没不詳）兄弟と合流して2,000余人で備前国へ渡り今木城（現岡山県）に籠城した。教経は2,000余騎でこれを包囲し、更に福原から援兵数千騎を得て攻め落とした。これら一連の戦いを合わせて“六ヶ度合戦”という。

1185年（元暦2年），“壇ノ浦の戦い”で義経は、平氏の本営讃岐国屋島へ奇襲をしかけた。平氏は屋島を捨てて船で逃げ出したが、義経の意外な寡兵と知って激しい矢戦となった。教経は“舟戦にはやり様があるものだ”と言うと、鎧直垂を着ずに、軽装で戦い、見事な技で敵を射落とし逃すことがなかった。義経の郎党たちが主人を守ろうと矢面に立つが、“そこを退け、雑魚ども”と言うや、さんざんに射て10騎を射落とした。覚悟を決めた一門の者たち、二位尼と安德天皇が次々と入水する中で、教経はなおもひとり戦い続けた。最後には、壇ノ浦の戦いの敗戦の中さんざんに戦い、義経に組みかかろうとしたが、八艘飛びで逃げられ、大男2人を締め抱えて海に飛び込んで死んだとされる。「嗣信最後」<sup>63)</sup>によれば、教経“船戦は様ある物ぞ”と言って、鎧直垂は着給わず、唐巻染めの小袖に唐綾威の鎧着て、いか物づくりの大太刀はき、廿四さいたるたかうすべうの矢負ひ、滋藤の弓を持ち給へり、王城一の強弓、精兵にておわせしかば、矢先にまはる者、射とほされずといふ事なし。源氏の方も心得て佐藤三郎嗣信（生没不詳）や武蔵坊弁慶（不詳-1189）などが義経の矢面にふさがり給えば、力および給わず「矢面の難人原、そのき候へ」<sup>64)</sup>とて、さしつめひきつめさんざんに射給へば、やにはに鎧武者十余騎ばかりが射落とされた。廿四さいたるたかうすべうの矢負ひとは、薄黒い斑点のある尾白鷺（わし）の尾羽で作った矢羽で、斑の高く大きい矢を24本背負ってという意味である。教経は、さんざんに矢を射て坂東武者たちを射落とし、矢が尽きれば、大太刀、大長刀を左右の手に持って、敵を斬りまくった。これを見た知盛は人を使って“罪つくりなことをするな、よき敵でもあるまい”と伝えた。“ならば、敵の大将と刺し違えん”と意を決した教経は舟から舟へ乗り移り、敵を薙ぎ払いつつ義経を探した。そして、ようやく義経の舟を見つけて飛び移り、組みかからんとしたが、義経はゆらりと飛び上がるや、舟から舟へと八艘彼方へ飛び去ってしまった。早業ではかなわないと思った教経は、今はこれまでと覚悟を決め、その場で太刀を捨て、兜も脱ぎ棄てて仁王立ちし、“さあ、われと思わんものは組んで来てこの教経を生け捕りにせよ。鎌倉の頼朝に言いたいことがある”と大声を挙げた。兵たちは恐れて誰も組みかかろうとはしなかった。三十人力で知られた土佐国住人安芸太郎（生没不詳）と次郎（生没不詳）の兄弟、そして同じく大力の郎党が、生け捕って手柄にしようと三人が教経に組みかかった。教経は一人を海へ蹴り落とすと、安芸兄弟を左右の脇に抱えて締め付け“貴様ら、死出の山の供をせよ”と言うや、兄弟を抱えたまま海に飛び込んだ。しかし、之も戦略の内であったという事である。小脇に抱えて飛び込んだ土佐国住人太郎と次郎兄弟は、実は平氏が逃走する際の手助けをしたとのこと。四国はもともと平氏が支配していた場所である。

『奄美大島物語』<sup>65)</sup>によれば、奄美大島に来島した平氏三卿の他に教経も同行したとのことで、教経は築城せず屋喜内村の阿室に屯した。屋喜内村と言うのは現在の宇検村のことで、奄美大島の西南部に位置し、焼内湾と呼ばれる湾が村域に大きく食い込む（図19）。この焼内湾の周囲が集落となっているが、村域の90%以上が山地である。この焼内湾の映像は、湯湾嶽から撮影されており、焼内湾の映像で集落付近が、宇検村の安室と思われ、隠れるのに相応しく入り組んだ湾である。奄美大島で一番高い山が湯湾嶽（図20）で標高は694m、貴重な宝物類は、この山の奥深くに教経が責任者となって格納したとのこ





図19 屋喜内村の阿室と思われる宇検村の焼内湾  
(Wikipedia)



図20 湯湾嶽（宇検村 HP より）

と。教経の末裔と称する宝村金喜玖翁（生没不詳）は、かつて孫の宝村喜玖男（生没不詳）と現場を調べたことがあるそうだ。場所は湯湾だけ8合目ほどの森林内、苔むす小径をくねりくねって辿り就く所で、自然の洞窟内に大小の壺やかめが数個あり、真ん中に本物の三種の神器が奉納され、その周囲に諸処の宝物が格納され、それらを囲んで二十三人の緋おどしの鎧かぶと姿の守護格の人が生ける如くに座していたとのことである。

筆者は、教経について確かめるべく宇検村役場や宇検村教育センターを訪問して教経について確認したが、聞いたことがないとのことであった。湯湾町に平姓の住民が1名在住しているとのことで、教育センターの方が電話で確認したが、そのような事実は聞いたことがないとのことであった。『大奄美史』にも平氏三卿が奄美に来訪したことは記載されるが、教経については記載されていない。

### Ⅲ. 平氏伝説の地訪問

平氏落人伝説は方々にあるが、ここでは奄美大島に来島する前に平氏の公達が安徳天皇を擁して落ち延びたとされる高知県、鹿児島県の硫黄島、喜界島を訪問して事の真相を探ることとした。まずは高知県である。四国一帯はもともと、平氏が支配していた地域であるから潜伏・逃亡するには格好の場所であったと考えられる。高知県は四国地方の一つで太平洋に面しており、台風の襲来が多い県である（図21）。図で見ても明らかなように太平洋に面して横に伸びた地形で、そのほとんどが海の近くまで山が迫る典型的な山国で、山地率は89%と全国一位である。今回の調査は高知県馬路村に落ち延びたとされる教経一族の屋敷跡と、越知町の横倉山の安徳天皇陵墓である。馬路村は、高知県東部の1,000m級の山々に囲まれた山間に位置する。村内は馬路地区と魚梁瀬（やなせ）地区に分かれている。馬路村の千本山（せんぼんやま）は、標高1,084.5mの山である（図24）。越知町は高知県の中西部に位置する自然豊かな町で、横倉山県立自然公園が広がっている。横倉山は標高800mの高さであり、この横倉山には、壇ノ浦の戦いから逃れてきた安徳天皇の伝説がある。この度、この両地域に伝わる平家伝説を訪ねてみた。図24でみる限り、馬路村から横倉山のある越知町までは約106km、車なら2.3時間で到着すると思われるが、子女を伴っている、あるいは山間部を隠れるように移動するとしたら一日10kmは歩けるであろうか。

#### 1. 高知県馬路村

高知県馬路村は教経が潜伏していたと言われる。馬路村は陸奥の国、岩城の城主の末孫平高師長（生没不詳）が、“保元の乱”の時、崇徳上皇方につき、戦いに敗れた後、1157年（保元2年）9月に四国に落ちのび、徒者数名と荒野を開拓した。その時、野生の馬があらわれ、作物を荒らし、飼い馬を害し、その足跡が村中一面に及んだので馬路と名付けたとされる<sup>66)</sup>。

先述したように“壇ノ浦の戦い”で教経は、土佐国住人安芸太郎と次郎の兄弟を左右の脇に抱えて締め付け“貴様ら、死出の山の供をせよ”と言うや、兄弟を抱えたまま海に飛び込んで死亡したと『平家





図21 高知県馬路村と越知町の場所

物語』は記している。しかし、教経は、安芸太郎と次郎の兄弟を左右の脇に抱えて、海に飛び込んだと見せかけて、密かに壇ノ浦を逃れ、彼らに道案内をさせて讃岐の屋島（香川県）を経て阿波の祖谷（徳島県いよ）へ着き、一族はそこにしばらく滞在した。そんなある日、一人の旅人が一夜の宿を申し入れたので源氏の回し者がやってきたと怪しんで切り殺した。そこで教経は一族をつれて山の尾根伝いに東南の方向へ進んだ。山の頂上に着いた時に一族は、四方を展望しながら、自分たちの住居を探し求めた。従臣の一人が南方の森を指さして、あのこんもりと茂った丸い山を住居にしようと進言した。教経は、あの森は甚だ吉である。丸山をわれわれの住居にしようといった。その森は“甚吉が森”と呼ばれるようになった。“甚吉が森”は香川県との県境に位置し、標高は約1,423mである。図24は馬路村梁瀬地区の地図であるがかなり山は深い。

一族は“甚吉が森”を下って中川に落ち着いたが、間もなく千本山の山すそを横切り、奥西川の一の谷に移って住居とした。教経一族は、安芸の大領真康（生没不詳）の援助を受けながら武術の稽古に励み、時期が来るのを待った。これが、現在、魚梁瀬で行われている“古式弓射式”の始まりとされる。歳月が過ぎ、教経もこの世を去った。従臣たちは、墓標を造らず自然石を置いて周囲に竹を四本植えて目印とした。現在、この屋敷跡には“能登守平教経一族の御屋敷跡”と刻まれた自然石が立てられているとのこと。しかし、訪問した際にその跡地を示した自然石は発見できなかった。但し、千本山の入り口手前左側に“平家屋敷跡”と言う小さな立て看板（図22）を発見した。“平家屋敷跡”という看板から300mくらい登ったところにそれらしい平地を発見することはできた（図23）。

幾年か過ぎて世の中が落ち着くと教経一族は、土地が狭くて生活に不便を感じるようになったので、新しい土地を求めることにし、熊野権現の神意をうかがって、屋敷の下を流れる西川に築を流した。流れ下るところおよそ14km、築が流れ着いたところを“魚梁瀬”と名付け、ここを永住の地にした。教経の子孫は“門脇姓”を名乗り、東方に屋敷を構えた。この屋敷が戦国時代に魚梁城（平城）となった。また、家老の谷井・中屋等の一族は西方に屋敷を構えた<sup>67)</sup>。

しかし、現在魚梁瀬地域はダムの貯水地になって水の底に沈んだようだ（図25）。図26は魚梁瀬の由来の説明をした看板である。

馬路村に熊野神社がある。それは、内大臣重盛が病気に罹った際に、紀州の熊野十二社権現に願をかけたが、平癒祈願の甲斐なく重盛は1179年（治承3年）に亡くなった。その時、供をしていた大野源太左衛門（生没不詳）と弟の源五左衛門（生没不詳）が1186年（文治2年）に紀州の熊野に行き、熊野十二社権現を勧請し、相名（徳島県あいみょう）の三山社殿を建立、十二社権現の神霊に重盛公のご霊を加えて、十三社妙見大権現とし、後に熊野神社とした。その時から源太左衛門は馬路村の神職となった。また、弟の源五左衛門は、香美郡井野村（現在の芸西村道家）に十三社妙見大権現を二位田の森に勧請した<sup>68)</sup>。また、魚梁瀬熊野神社は、教経一族が、魚梁瀬を永久の住居とし中屋敷西の森に熊野権現を奉斎し、安芸氏から受けた恩を徳として、安芸大領真康を大領権現として合祭したものである。後世になって熊野権現を大領権現と称するようになった。ご神体は教経が持参した鎧・兜にし、ご本尊は安徳天皇で男神像・女神像、不動明王立像が祀られている<sup>69)</sup>。魚梁瀬にある城福寺は、高野山真言宗で本尊は阿



図22 千本山入り口にある看板



図23 教経一族居住跡

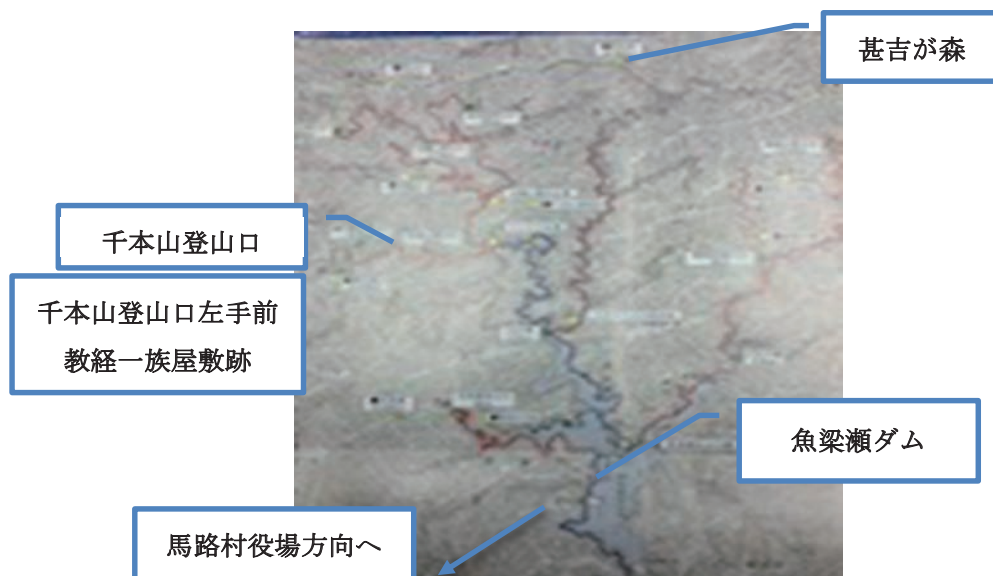


図24 馬路村梁瀬地区



図25 魚梁瀬地域（だむの貯水地）



図26 魚梁瀬の由来説明



弥陀如来である。古い棟札に門脇中納言経盛次男教経元暦の頃、浄福寺を開基したと記してあり、教経一族の菩提寺であったと考えられている<sup>70)</sup>。

## 2. 高知県横倉山

高知県横倉山は、越知町にある山で、標高800mの低山である。地質学的には、オルドビス期のコノドント等の化石が発見され、又、植物学的には、牧野富太郎(1862-1957)が自身の研究の場として活用するほどに自然の植物が豊富な場所である。地質や土壌などの環境条件によって、異なった森林植生が狭い地域の中にまとまっているからだそうだ。横倉山は越智付近を開いた別府経基(生没不詳)が開山した山で、土佐国唯一の修練道の霊場でもある。

壇ノ浦で入水したと言われる安徳天皇の生存説は、語り継がれるところであるが横倉山における安徳天皇潜行伝説は、最も有力であると言われる。高知県越知町編纂の『横倉山』<sup>71)</sup>によれば、阿波の豪族田口成良(重能 生没不詳)は、安徳天皇の身が危ないことを知り、部下一千騎を従えて、屋島の壇ノ浦に向かい、知盛をはじめ平氏の諸将と図り、自分は源氏に降る風を装って源氏を欺き、本体は天皇の身代わりを立て、御座船と共に西海に落ち延びさせた。それは『三島村誌』に記載された知盛を中心に編成された本陣の者達であろうか。成良は阿波国、讃岐国に勢力を張った四国の最大勢力で、早い時期から清盛に仕え、平家の有力家人として清盛の信任が厚かった人物である。

“壇ノ浦の戦い”後、陸に上がった安徳天皇は、成良をはじめとして平氏の大勢が共をし、四国山地を潜行して絶舌に尽くしがたい苦労の末に椿山(つばやま)に辿りついた。椿山は愛媛県と高知県の県境にあり、標高1,585mで秘境の山と言われる。同山は大自然の環境で青く、水清く、世をしのぶには都合の良い場所で一番の安らぎの場所であった。が、日々勢力を増す源氏の探索は厳しく、平氏の残党も各地に逃げ隠れしていたので、落ち武者狩りが厳しく行われていた。知盛や従臣たちは、椿山は安全な場所であると思っていた。ある日、遍路風の男が訪ねて来て、“人が住まない川上から椀が流れてきたので不思議に思って訪ねた”と言ったので、この椿山の隠れ家が知られることを恐れた滝本軸之進(生没不詳)という者が、この男の帰り道を襲って殺した。このことを聞いた知盛は椿山も危ないと考え、他所に移ることになった。大勢がうち揃って移動するのともうかと考えた軸之進は、自身が天皇の名を語ってこの地に留まるので、天皇御一行は人に気付かれぬよう落ちのびるよう進言した。

椿山を出発した天皇一行は、奥名野川を通り、峠を越え、山腹を下り、仁淀川岸(高知県の町)を下る険しい道筋や、高瀬の西谷口の上手より山に登る険しい道など、天皇の手を引いたり、よじ登ったりして、畝伝いに通り抜け高瀬の峰(香川県)についた。ここでしばらく滞在した後、1186年(文治2年)、高知県の別枝の都(仁淀村)行在所で1年余り滞在した。この地の住民は良心込めて天皇に奉仕した。行在所の上方の宮の平に白王八幡宮を建立して、平家の一族の武運を祈願した。白王と言うのは天皇の皇の字を上下二つに分割したものである。これとは対照的に名野川滞在地には黒王神社を設立した。これは源氏の追求から逃れる手段であったと言われている。別枝郡は人の和こそ申分ないが、地の利を得ないので困った知盛は、東方にそびえる横倉山に登り、詳しく調査した。結果、地の利が良く山腹は農耕に適し、山には鳥獣、川には魚類が多く、食糧の自給には最適。険しい山を利用すれば、源氏の探索に対する警戒、防戦に必要な構えが容易であるとの結論に達した。そこで、1187年(文治3年)、横倉山に行在所が完成したので、天皇は知盛、清盛の異母弟の経盛、乳母の虎岡(図32上段右から六番目乳母虎岡姫が記載されている、生没不詳)、茂良(図32中段左から三番目)等80余人を従えて横倉山の行在所に移った(図27)。また、その近くには湧き水があり安徳天皇が使用した(図28)。

お供の方々は、行在所より300mほど離れた天の高市という場所に25軒ほどの住居を建てて住み、横倉山の要所要所へ警備の者を配置し、警戒を厳重にすると同時に、弓術・馬術などの訓練も行った。安徳天皇は時折、詩・管弦なども行い、鞠ヶ奈呂へ出て従臣を相手に蹴鞠や乗馬に興じながら、武術の錬磨にも励んだ。また、畝傍山へ出て、神武天皇を遥かに拝み、平安の森(アゼビの森)に上っては、東北方に京都の平安宮を拝した。しかし、1200年(正治2年)、病のため、23歳でその波乱の生涯を閉じ、鞠ヶ奈呂に葬られた。次に横倉山行在所に崩御した安徳天皇を、知盛が玉室大神として1200年(正治2年)に中獄に祭り、上の宮としていたが、1866年(明治元年)御獄神社と改称され、更に1949年(昭和24年に)



神社本庁統理の通達により、横倉宮と改称された(図29・30)。安徳天皇が従臣達と蹴鞠を楽しんだ鞠ヶ奈呂陵墓参考地は、現在、宮内庁所轄になっている。この場所は山頂付近にあり、駐車場から(体感としては約2km)、かなりきつい山道を登らなければならない。明治初年、越知村長として赴任した川添亥平(生没不詳)が、村人を伴って伝承の天皇陵墓を探索し、発見した場所である。1883年(明治16年)陵墓見込地として保護に留意するようにと宮内庁からの通達を受け、立木と共に宮内庁の所轄となり、祭祀などの経費の支出がなされ、1926年(昭和9年)陵墓参考地になった。

横倉山標高660mのところに杉原神社(図31)があり、その手前に安徳天皇に同行した78名の従臣達の名前が記載された大看板がある(図32)。その中には壇ノ浦で死亡したとされる知盛、経盛・教経親子や、資盛・有盛・行盛等の名前が確かに記載されている。杉原神社の祭神は伊蛇那岐尊(いざなぎのみこと)と伊蛇那美尊(いざなみのみこと)である。1189年(文治3年)勧請し、中の宮と称していたが、1872



図27 安徳天皇行在所跡地(筆者撮影)



図28 安徳水と呼ばれる湧き水の場所(筆者撮影)



図29 横倉宮山門(筆者撮影)



図30 横倉宮(筆者撮影)



図31 杉原神社(筆者撮影)



図32 杉原神社右側に設置された看板(筆者撮影)  
安徳天皇に同行した臣下78名の氏名



年（明治4年）杉原神社に改称した。また、杉原神社から横倉宮への参道約400mの左手の少し上にあるところが先述した安徳天皇行在所跡である。杉原神社より西方の平坦地に従臣達の住居があった。また、標高785mのところに馬鹿だめしと称する大断崖があるが、その下に洞窟をつくり、身を隠す場所とした。この場所は横倉宮社殿の真裏にあるそうだが、今回は訪問していない。

### 3. 硫黄島（三島村）

次の安徳天皇生存説で有力なのが鹿児島県三島村の一つである硫黄島である。三島村は竹島・黒島・硫黄島の三つの島からなり、硫黄島は3つの島の中心に位置する（図33・34）。硫黄島は周囲14.5km、面積11.7km<sup>2</sup>、椿、つつじ、車輪梅の原生林や、道路まで放し飼いの孔雀が散歩する等、のどかな風景が見られる島である。鹿児島港からフェリーで約4時間、島の北東部には、盛んに噴煙をあげる活火山、硫黄岳（703m）がそびえ、名前のとおり岩肌一面に硫黄を噴出している。また、島のいたる所から温泉が湧き、流れ出た温泉と硫黄が黄緑色や赤色に海の色を染めていたためにこの島は“鬼界ヶ島”“黄海ヶ島”等と呼ばれた。



図33 硫黄島 三島村（竹島、硫黄島、黒嶋）の一部  
（三島村 HP より）



図34 平家城跡地から見た硫黄島  
（筆者撮影）

ゆえに、『平家物語』にある俊寛が流された鬼界ヶ島<sup>72)</sup>と言うのは実はこの硫黄島であつたろう。何故かという島の様子や一人島に残された俊寛が自身を訪ねてくれた有王という者に「身に力のありし程は、山に登って硫黄と云ふ物を取り、九国よりかよふ商人にあひ、くひ物にかへなどせしかども」<sup>73)</sup>等といった記述があるからである。実際の喜界島には硫黄が出る山はない。

島の環境について言えば、流された俊寛以外の二人は、熊野信仰があり、島の中で、熊野に似たところはないかと探索している。その描写によれば、“一方は紅の錦繡で彩られた林の、一方は雲のなびく神秘な峰で、うすものや綾のような変化に富んだ緑におおわれた場所に出た。南を望むと、海は満々としてひろがり、雲か霞のようによせる波がはてしなく、北をふりかえると、峩々としてそびえる山岳から、百尺の滝がみなぎり落ちている。滝の音はいちだんとすさまじく、吹きわたる松風も神々しい状態は、飛竜権現の鎮座される那智の御山そのままであった。”そのうち、日数も重なって、着替える服もなくなり麻の衣に身をまとして、沢辺の水を岩田川の清流と思って、水垢離にくみ、高い所にのぼっては、そこを本宮の発心門になぞらえたりした<sup>74)</sup>。水垢離とは神仏に祈願するため、冷水を浴びて体のけがれを去り、清浄にすることである。その後、成経と康頼は赦免されたが俊寛にはその沙汰がなく、俊寛は一人、島に残された。硫黄島の港には俊寛が“おいていかないでくれ”と叫ぶ様子（図35）や、丘の上の見晴らしの良い平家城跡地などに設置された俊寛像が（図36）がある。同銅像は、2011年（平成23年）、歌舞伎役者の中村勘九郎（1981- ）が“俊寛”を題材に、中村勘三郎（1955-2012）を主演として歌舞伎の公演を行ったとのことで、その記念碑にもなっていた。

先述の赦免の話聞いた俊寛の侍童であつた有王（生没不詳）は、俊寛が一人島に残されたことを聞き、鬼界が島を訪れた。訪ねた鬼界が島は、田もなく、畑もない、村もない、言葉も通じない場所であつた。俊寛の行方を探し求めていると、磯の方から陽炎のような、やせ衰え、「髪は空さまへおひあがり、よろづの藻くづとりついて、おどろをいただいたるがごとし、つぎ目あらわれて、皮ゆたひ、身にきたる物

は絹布のわきも見えず、片手にはあらめを持ち、片手には魚を持ち、歩むようにはしけれども、はかもゆかず、よろよろいでしきたり。』<sup>75)</sup> その人物に俊寛について尋ねると自分が俊寛であると答えた後、意識を失った。かつては立派な方であったのに、有王は蛾鬼道に迷ったのかと思うほどであった。恐らく、その状況は、平家城跡地に設置された俊寛像（図36）がイメージしやすいであろう。意識を失った俊寛は、僧徒の声かけによってやがて意識を取り戻し、自宅という場所に案内した。案内されたその家は、浜辺に流れ着いた竹を柱にして、葦を束ね結って桁や梁として上下に松の葉をびっしりと敷き詰めた小屋であった（図38・39）。



図35 浜辺の俊寛像（筆者撮影）



図36 平家城の俊寛像後方は硫黄岳

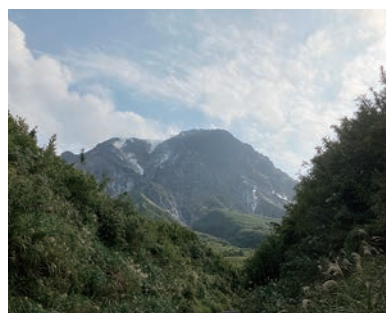


図37 平家城から見た硫黄（筆者撮影）



図38 俊寛堂入り口と看板（筆者撮影）



図39 俊寛堂（筆者撮影）



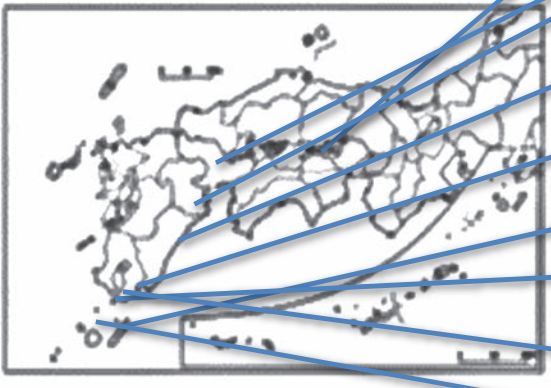
図40 俊寛の庵（筆者撮影）

現在の庵は、平家城跡地に続く道の中腹にあり、小さいが綺麗なお堂である（図40）。俊寛は有王が訪問した日から23日目に死亡した。有王は庵をきりくづして遺体の上にかぶせ、松の枯葉や、葦の枯葉を取り集めて俊寛を火葬にした。そして有王は、その遺骨を拾って首にかけて上京、一人生き残った俊寛の娘に届けた。これらの記述からは、喜界島に設置されている厳かな俊寛ではなく、そして、立派な木棺に納められた人物とは程遠い。その後、有王は高野山に上り、遺骨を奥の院に納めて法師となって諸国七道を回って主人の後世を弔った。「平家の生末いかなるのか」<sup>76)</sup> という言葉が、ここでの締めくくりの言葉である。清盛によって硫黄島に流され、悲惨な状況のまま俊寛が亡くなった場所に、自身の孫たちやその一族たちが落ち延るとは、清盛も夢にも思わなかったであろう。

さて、先述した清盛が悪行の一つとされる俊寛の事について多くの行数を重ねてしまったが、本来の、硫黄島訪問の目的は平家の公達の逃避行の拠点の一つとされる壇ノ浦からの道程である。『三島村誌』<sup>77)</sup> によれば、安徳天皇危うしとの情報を得た平氏側では知盛を中心に対策を練った。

第一軍は資盛を大将として安徳天皇、大納言時房（生没不詳）、中納言経正（1159-1222）、従三位参議業盛（1161-1230）、淡路守清房（平清房 不詳-1184）、豊前守知邦（生没不詳）、美作守宗親（生没不詳）、左大弁忠綱（藤原忠綱？）、蔵人左衛門大尉通正（生没不詳）、狭野内侍（さののないじ 1166-1245）他、侍大将越中次郎兵衛尉景光（生没不詳）、上総五郎兵衛尉平盛継（不詳-1192）、日高阿波前司吉房（生没不詳）、福原相模原守季長（のち肥後 生没不詳）以下300人余り 雑兵と海路案内人含めた1,060人余りが船団70余艘で日向灘を經由して硫黄島を目指した<sup>78)</sup>。





1. 屋島壇ノ浦発	2月19日
2. 八島発	3月15日
3. 高島着 発	3月16日未明 3月16日
4. 細島着 発	3月17日 3月29日
5. 志布志着 発	4月5日 4月8日
6. 浦田着 発	? 4月15日
7. 内之浦着 発	? 4月18日
8. 大泊着 発	4月21日 4月25日
9. 硫黄島着	5月1日

図41 資盛一行の行程（三島村誌 p106を参考に筆者作成）

第二軍は、資盛の代理である従一位行内大臣で平氏政権の惣管平宗盛（1147-1185）の次男新従三位平能宗（1178-1185）を中将として筑紫・長州辺に、これに大納言時忠（1130-1189）、従三位宰相季房（生没不詳）、四位佐中将清経（1163-1183）、正五位佐馬頭行盛、他雑兵併せて1480余人が移動した。この時能宗は、顔形が資盛そっくりであったとのことだが年齢は8歳ほどで、味方の者も身代わりであることは知らなかった。あくまでも資盛が帝を奉じて壇ノ浦の戦いに参加していると見せかけた。帝の身代わりは総君という者で大納言時房の娘で当時7歳、彼女を平家の棟梁宗盛の長男平清宗（1170-1185）の養子とした。これが誠となると高知県横倉山の安徳天皇は、身代わりのこの総君という女子であったのか？

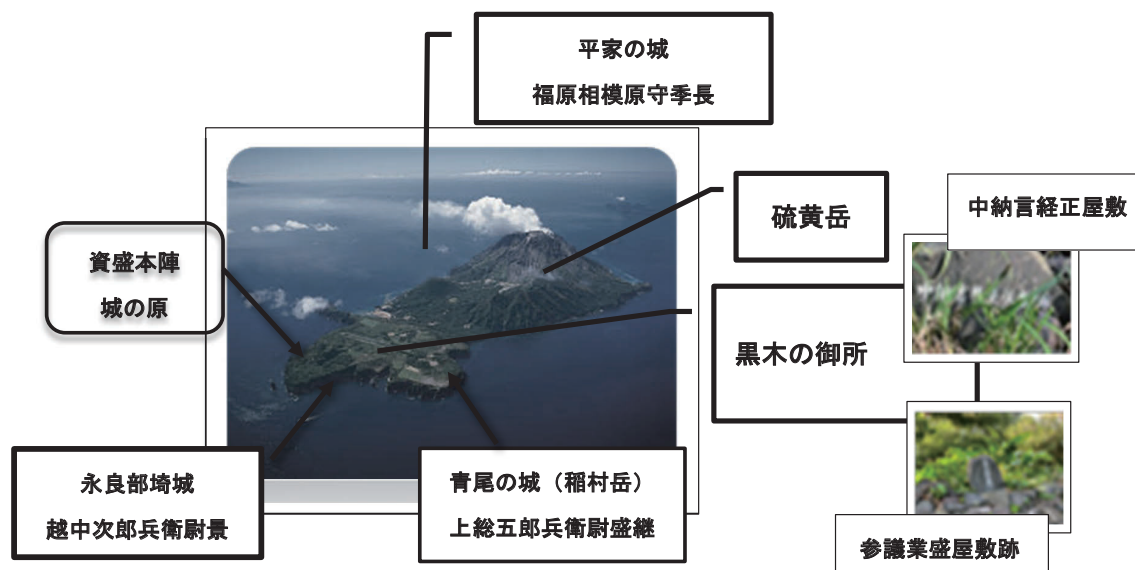


図42 硫黄島防備図（三島村誌 p111及び三島村 HP より筆者作成）

第三軍は、征夷大將軍知盛を大将に、従一位太政大臣兼内大臣宗盛、正三位右衛門督清宗（1170-1185）、正五位上伊賀守平知忠（1180-1196）や経盛、教経、経盛、有盛、二位尼、建礼門院等8,900余人が屋島に陣本隊として残ることとした。

壇ノ浦の開戦は3月24日とされるが、資盛一行は、2月19日に既に壇ノ浦を出て南下を進め、3月15日には八島（山口県）を出発、豊後水道を抜け、日向灘を更に南下した（図41）。

船団は平氏の船であることを隠すため兵糧や生活用品などを積み、釣り船に紛れて津づ浦々を伝い、

高島（大分県豊後）、細嶋（宮崎県）、志布志・浦田・大泊（鹿児島県）経由で種子島の浦田に着いたのは4月5日、途中、南西風にあって困難を極めたが、5月1日に硫黄島に着いた（図41）。彼らは船が豊後のあたりに着いた頃からあたりの騒々しさに開戦がまじかと直感したようだ。硫黄島の長浜港に着船した平家一門の参議藏人太夫業盛は、硫黄島に配流され赦免された成経から土産として硫黄島の地図を貰っていた。資盛は、その地図と実際の地形と合わせながら、少しも違わず、この島こそ、安徳天皇の安んじる場所であると確信し、早速天皇のお住いの場所を設立、これを黒木の御所とし、その周辺の守りを固めるために硫黄島防備図を作成した（図42）。島の左側の城の原と言う場所に資盛本陣を、長濱浦には永良部崎城を築き越中次郎兵衛尉景光、矢筈岳には平家城を築き、ここには福原相模守季長、黒木御所の右側の稲村岳の城には上総五郎兵衛尉盛嗣を配置するなど要所要所を固めた。その他、1,000人近い軍団の兵士を4分割して配備したのか。また、港の近くにある黒木の御所を守るために、御所の周りを屋敷割して重臣たちが住むことにした。黒木の御所は、安徳天皇の屋敷跡であるが、現在、子孫だと言われる長濱豊彦氏の屋敷になっている。黒木の御所の周辺にも、狭いながらも経正や業盛の屋敷跡地が現在も残っている。

屋島から硫黄島に落ちてから2年目の1187年（文治3年）、安徳天皇は、資盛に狭野内侍（1166-1245）を賜り、1190年（建久2年）資盛と狭野内侍との間に男子（伊王丸 正二位内大臣吉資 1190-1250）誕生、1194年（建久5年）には次男の阿丸（くままる 従二位左大将兼内大臣吉広 1194-1259）、1198年（建久9年）には女の子が誕生した。この女子は15歳で安徳天皇の妃となり、櫛匣（くしけ）の局（1198-1265）と言った。彼ら二人の間に子ができたのは、1221年（承久3年）の事であり、安徳天皇は44歳、櫛匣の局は24歳であった。若宮は隆盛親王（正二位内大臣若宮 1221-1292）と称した。

一方、頼朝は、天野藤内景光（生没不詳）や宇都宮信房（1156-1234）らに平氏討伐を命じた。景光の嫡男、遠影は5月17日には硫黄島に攻め入り、歯向かう平氏を13人ほど切った。他は降伏したようだ。その後、1193年（建久4年）に第二回平氏残党討伐が行われたが、この時は薩南諸島には手が伸びていない。壇ノ浦で敗れてから18年目の1202年（建仁2年）の春になると源氏の白旗や印をつけた兵船が出没するに至り、資盛は源氏の追討が近いうちにあることを察し、一門をそれぞれ南の各島に分散させることとした。資盛は、時房、経俊、景光、盛綱らと共に瑯琊国（奄美大島・琉球）へ、他の者達は、屋久島や竹島、黒島に移ることにした。また、息子の伊王丸を安徳天皇の傍に残す計画を安徳天皇に説明し、了解を得た。そして、この伊王丸を元服させ、吉資と改名黒木の御所の守り役とした。この吉資の学問・政治の師として経正、業盛が守り役になった。1222年（貞応元年）、清盛の弟の経盛の長子であり、敦盛の兄である中納言経正は、臨終の際に駆け付けた安徳天皇に、一門の不忠不覚の為に帝に苦しみをかけたことを詫言しながら、この世を去った。経正の墓（図47）は安徳帝墓所内にある。経正の妻は佐内侍（すけのないじ）と言ひ、大納言時忠の娘である。

『奄美大島物語』によれば、まず、硫黄島に18年間潜伏した資盛は、1202年（建仁2年）に硫黄島を脱出、喜界島に辿り着いた。ここで3年間、潜伏、現在平家の森とばれている居城をもうけた。同じく資盛を探し、山伏姿に変装した行盛・有盛は、豊後あたりを徘徊していたが、1203年（建仁3年）3月、硫黄島大宮の鳥居建立の為に福原右馬助と菊池二郎行吉両名が、適切な石を探し、豊後を訪れた際に偶然、二人と再会した。事情を知った有盛・行盛両名も鳥居寄進に石の大鳥居を調進して大船二隻に積み込み、共に硫黄島に下った。現在、残っている大鳥居（図52）だと言われている。有盛・行盛両名は安徳天皇に拝謁、2年ほど仕えた後、資盛一行の後を追って喜界島に渡った。彼らは、1205年（元久2年）に喜界島に行き、資盛と20年ぶりに再会した。

他方、安徳天皇と一緒にだったとされる教経は一端高知県の馬路村と言う場所に落ち着いたが、当地の安徳天皇が1200年（正治2年）に病気の為に逝去したので、一族と分かれて硫黄島経由で喜界島にたどり着いた。資盛一行が喜界島に上陸後の3年目、再会を果たした教経も含めた4卿は、源氏勢の追跡の気配がないことから、大島本島に移動する計画を成し大島本島の偵察を行った。偵察隊の報告を受けた4名は、本土上陸を決し、喜界島に主頭白尾大膳太夫主従40名ほどを滞留させ、三か所に分かれて28隻の船、総勢684人で大島に攻め入った。それは1205年（元久2年）であった。





図43 御前山の安徳帝墓所（筆者撮影）



図44 安徳天皇墓所（筆者撮影）



図45 櫛匣の局の墓



図46 隆盛親王の墓（筆者撮影）



図47 中納言経正の墓（筆者撮影）



図48 従三位業盛の墓（筆者撮影）

現在、黒木の御所跡地には、従臣達の屋敷跡が残されている。安徳帝墓所（図43）にも説明されているが、安徳天皇の真後にある墓は従三位業盛（1161-1230）（図48）、次に狭野内侍の墓（図49）、この者は1187年（文治3年）に資盛室となっている。但し、この島に資盛の痕跡は大きい墓はない。安徳帝墓所の後方に資盛の娘で、15歳で安徳天皇の妃となった櫛匣（くしけ）の局の墓（図45）、正二位内大臣若宮（隆盛親王（1221-1292）等の墓（図46）も安徳帝の後方にある。その子孫が現在の長濱家であると





図49 資盛妻狭野内侍の墓



図50 正二位内大臣左大将吉資



図51 従二位左大将兼内大臣吉盛  
(筆者撮影)



図52 安徳天皇が皇居とした熊野神社 (筆者撮影)



図53 神社の説明看板

言われている。

安徳天皇は1243年（寛元元年）66歳まで此の地で隠遁生活を送った。その他の墓は、資盛の長男正二位内大臣左大将吉資（1190-1250）の墓（図50）、吉資の子であると考えられる従二位左大将兼内大臣吉盛（1206-1259）の墓（図51）がある。

図52の熊野神社は同地に配流された俊寛・成経・康頼によって設立されていたもので、安徳天皇は、後に青木御所から熊野神社を皇居にしたとのことで、何回か修復がなされ、現在に至っている。また、安徳天皇の末裔とされているのが長濱権之丞吉延（生没不詳）と言い、現在まで続いている家系である。三島村誌は長濱家や日高家等に残る古文書や他の島に残っている平家関係の文書を参考に編集されている。これらの古文書は今回の訪問では拝見できなかった。

#### 4. 喜界島

喜界島は、鹿児島県の離島で、鹿児島市と沖縄本島の間に連なる奄美群島内で最も北東部に位置する。奄美大島に近い東の沖約20kmの位置にあり、全島ほとんどがサンゴ礁の島である（図54）。『喜界町誌』<sup>70)</sup>によれば、喜界島には遺跡や貝塚が多く発見されており、縄文時代から人が住んでいた証となっている。中でもグスク時代と呼ばれる時代の遺跡として資盛が立てたと言われる七城や平家森と呼ばれる遺跡が現在も残っている。

『吾妻鑑』には、「1188年に鎮西の守護にあたっていた天野園影（生没不詳）らを、貴賀井島に派遣して合戦を遂げ、島内の者どもはすでに降伏した。」<sup>80)</sup>と書かれ、『平家物語』では、先述した俊寛は、成親の長男丹波少将藤原成経（1156-1202）や判官平康頼（生没年不詳）と共に鬼界ヶ島に流された<sup>81)</sup>。この記載の“鬼界ヶ島”は、現在の喜界島であり、時代によって“貴賀井島”“貴海島”“喜界島”等、様々





図54 喜界島（Wikipedia）より

図55 俊寛像についての説明  
（筆者撮影）

図56 俊寛像（筆者撮影）



図57 俊寛の墓（筆者撮影）

に表現されている。喜界島では1974年（昭和49年）に人骨が発見され、人類学的調査を行ったところ、俊寛の可能性は否定できないとして、同地に俊寛の銅像（図55・56）と墓（図57）が設置されている。硫黄島の俊寛像とは厳然とした姿勢に相違がある。

本題に入るが、硫黄島に入った平氏の一行は、ひとまずこの地に安住したが、白旗白印（源氏の旗印）が折々現れるので、1202年（建仁2年）、永年の旧臣は分散することになり、資盛および時房（大納言時房）、経俊（平経俊 1166-1184）、盛継（上総五郎兵衛尉平盛継 不詳-1194）、景光（越中次郎兵衛尉景光 生没不詳）らは、手勢300余名を率いてヤナ国（奄美大島）に向かったが、逆風に遭って、喜界島の東北端沖名泊（ウチニャードウマイ）に漂着した（図58・59）。彼らは、先述した資盛を大将とした第一軍にその名前を見出す。漂着当時、島では大船の来島に驚き、資盛一行も警戒して寄り付こうとしなかったが、島の豪族勘樽金（かんたるかね）が船との折衝に当たった。この勘樽金は息女を有盛に上げ、この息女と有盛との間にできた一子を思語羅子と名付けたとされる<sup>82)</sup>。

島に上陸した資盛一行は建仁二年（1202年）志戸桶沖名泊に上陸し志戸桶と佐手久の間にある増花田に七城（図60・61）と呼ばれる居城を構え、島の東部入口（早町港）からの敵の来襲に備えた。七城は島の北端に近く、太平洋に面していて海への視界は東側に180度で海を見張るには有利な地形である。城は東向きで東側は断崖、続いて急斜面があり、西側は平坦な畑地になっている。七城周辺は肥沃な畑地が広がっており、水田も開かれ、ある程度の食料の自給が可能な地であったと考えられている。おの七條に住んでいた頃に資盛は、島の女との間に一子を得、大蛇羅（うふじゃら）と名付けた。大蛇羅は資盛が奄美大島に渡った後も母と共に島に留まり、七城を守った。志戸桶に残る大蛇羅家（操家一現・大良家）はその子孫と言われる。





図58 平氏来島の港 (筆者撮影)



図59 港に設置された遺跡の拡大図 (筆者撮影)

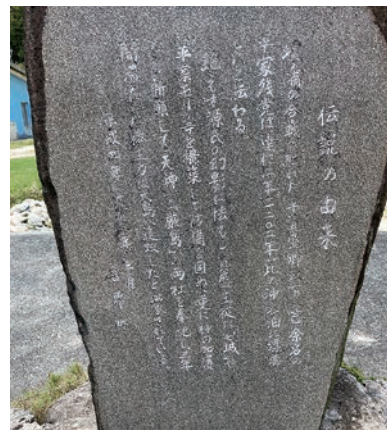


図60 七城沿いに設置された看板 (筆者撮影)



図61 七城跡地 (筆者撮影)



図62 平家の森入り口近くに設置された説明書き (筆者撮影)



図63 平家の森登り口 (筆者撮影)



図64 平家の森頂上に群生する白百合 (筆者撮影)

次に、資盛は、島の東部入り口の港早町港からの敵の侵攻を抑えるために、島の北端に近く早町港背後の要害の地にも塁(とりで)を築き、七城とともに攻守兼備の重要な拠点を構えた。ここが平家の森(図62・63・64)である。平家の森は、高原状の台地に盛り土をして造られた山であると伝えられ、築くに当たっては全島民が動員され、用具も不足して着物の裾で土を運び上げたといわれる。この森の北側は緩い階段状であり、南東側は急斜面の連続である。山は軍事的に見て、海岸近くにあつて標高も72メートルと高いので監視や外海の見張りには最適であると同時に、前方が急斜面であるので攻めにくい城であった<sup>83)</sup>。

先述したように1203年(建仁3年)、行盛と有盛は安徳天皇一行と離れて豊後・豊前のあたりを徘徊していたが、豊後の国で福原右馬介季利と菊池二郎行吉に出会った。彼らは安徳天皇が青木の御所から熊野神社に移ったのち、大宮前に石の鳥居を設置することになり、その原石を探しに来ていたのである。彼らが豊後に来た目的を話すと、有盛・行盛両名は原石探しに協力して硫黄島に同行、安徳天皇に拝謁



した。その後、資盛と側近の諸将が、万が一を考えてそれぞれ、南海に散じたと聞き、資盛を慕って喜界島に渡った。壇ノ浦で手に手を取り合って入水したとされる3卿は、20年近い年月を経て喜界島で合流した。早速、彼らは奄美大島攻略に向かって計略を練った。奄美大島への平家来島については既に『平家落人と源為朝伝説の島―奄美大島歴史深訪 (1)』<sup>84)</sup>で報告したので、本論では省く。

『奄美大島物語』<sup>85)</sup>によれば、有盛と島の総領の女の間に生まれた思語羅子の後裔と言われる永家の系図には、有盛―思語羅子―勘樽金―無心好―永語―永久仁―当語―栄語―栄昌―親実となっている。また、沖永良部方面には有盛の子孫で孫八という者がいて武術に長じ、特に築城に非凡の技をなした。事あって沖永良部に下って同地の世の主になつて、その子孫が繁栄して大屋職百戸の長（ヒャー）等の重職についた。沖永良部の王城内のフバショという所に館を構え、孫八は、内城の要害に堅固な城を構えていた。しかし、主の要望によってこの城を明け渡し、後蘭の地形に着目してここに築城し、本拠地にしたという。著者の文氏も同地を訪れたが「同地の地形たる東西南北丘陵に囲まれた盆地で、一面の沼地をなし中央を流るる川を堰き止むれば、東、西、北は漫々たる塩水に満たされ、南西だけを防備すれば足るという自然の要塞で、流石に築城専門家孫八の居城を選定せる宜なりと思った。」<sup>86)</sup>と感想を述べている。

また、喜界島に潜伏中、行盛は信基（時信）という息子をなし、その子が種子島に渡って種子島氏の祖となったと伝わる。信基は北条時政（1136-1215）の養子となり時信と名乗って種子島に入り、後に初代種子島信基（平信基）と称した。

## おわりに

本論では、『平家物語』中心に『吾妻鏡』および地方紙で裏づけをしつつ、栄華を極めた清盛の人物像及びその影響をまともに受け、逃亡の果てに奄美大島に来島したとされる平氏公達の足跡を辿って改めて高知県馬路村、越知町の横倉山、硫黄島、喜界島の実地調査も含めながら論述した。

『吾妻鏡』は、事務的で業務日誌風な内容で、年月日や起きた事象及び登場人物に対する注釈等が挿入された、鎌倉時代成立から北条家支配に至る過程を史実に基づいて詳細に記した歴史書である。『平家物語』は、物語とは言え、清盛時代の平安京の史実を中心に、当時の神事なども含め、周囲の情景や人の心情などを実に巧みに表現したどちらかと言えば抒情詩的である。その中で筆者は特に、奄美大島に来島したとされる資盛、有盛、行盛を中心に丹念に調べたが、やはり、気になったのは清盛であり、何がそれほどまでの悪行であったのか考えるに至り、その1として『平家物語』で語られる清盛と建礼門院そして安徳天皇について検証した。次にそのⅡとして奄美大島に来島したとされる三卿と教経らが、『平家物語』で如何に記されているのか彼らの戦いの一片を検証、平氏壊滅したとされる壇ノ浦から、彼らが落ち延びたとされる高知県の馬路村と越知町、そして鹿児島県硫黄島、喜界島について実地調査を行った。安徳天皇を擁した従臣達の決死の逃避行は、方々にその足跡を残すものであり、確かにその地に痕跡が残っていた。ややもすれば身代わり説を流しながら、これも敵の目を欺く戦法であったのかと思うくらいにその生存説は確かに伝承されている。壇ノ浦から四国高知県の山々を経て、硫黄島、喜界島、奄美大島まで逃げに逃げて最後、奄美大島でその生涯を終えた公達は安寧の日々を送れたのか。源氏の旗印に絶えず怯えながらの日々であったのか。行盛が早合点をして自害して果てたのは残念であったが、彼らの多くは、島の文化に溶け込みながら、新しい文化を島に流入しながら、適応していった過程が見受けられる。本論で取り上げた平氏の公達は、奄美大島迄逃げおおせたと考えられる者達で、その他、多くの平氏の者達が南島の島々あるいは九州や中国・四国地方の山中で、殺されるという恐怖の中で過ごし、逃亡・潜伏そして逃亡の末にたどりついた奄美大島の温暖な気候と戦いとは縁のない人々との交流で安息を得られたとしたら幸いである。但し、見張り役の今井権太夫の怠慢によって戸口城の行盛郎党が自害して果てたのは不測の事態であった。

この度の『平家物語』を改めて見直す際に「敦盛最後」が気になった。その武将は一の谷の戦いで逃げ遅れ、わずか17歳で殺されたとのこと。先述したことではあるが、小学校の時に歌った「青葉の笛」の歌詞は、かすかにしか覚えていなかったが、WEB検索すると全文が掲載されていた。メロディは記憶していたので歌う事は可能である。「青葉の笛」は、1906年（明治39年）に発表された尋常小学唱歌だそ

うだ。随分と歌い継がれたものだ。清盛の悪事は私たちにやってはいけないことの戒めであるが。鎌倉幕府や以降の諸大名たちの天下取りの物語や、中国の歴史を記した司馬遷の『史記』にみても移り行くその支配者たちの行いは実にむごい。“煮殺し”“焼き殺し”“埋め殺し”“斬り殺し”“毒殺”等、尋常ではない、殺戮の様子が淡々と史実として記載される。と言っても慈恵入道の再誕とは言え、やはり、裏を返せば清盛の悪事が子孫の悲惨な滅亡につながっているのかもしれない。しかし、執拗に平氏狩りをした源氏の頼朝の時代もそう長くはない。鎌倉幕府150年の内、源氏の支配はわずか29年、後は北条家が執権としてではあるが、事実上その地位を奪った。源氏は為朝の時代からそうであったように身内同士のいがみ合いが、元凶であろうか。いずれにしても権力の頂点に上りその名を馳せたがる功名心と道徳心とは相いれないものがあると思われた。

### 参考・引用文献

- 1) 杉本圭郎著：平家物語一～四，講談社，2022年。
- 2) 杉本圭郎著：前掲書1)一，p17。
- 3) 昇曙夢著：奄美史，南方新社，1949年。
- 4) 文栄吉著：奄美大島物語，文栄吉著：奄美大島物語，pp80-96，南方新社，2008年。
- 5) 喜界町誌編集委員会編：喜界町誌，pp84-85，南日本新聞開発センター，2000年。
- 6) 三島村誌編集委員会編：三島村誌，朝日印刷，1990年。
- 7) 佐々木秀美著：平氏落人と源為朝伝説の島ー奄美大島歴史深訪 (1)，看護学統合研究 Vol.24, No.1, pp47-55, 2022年。
- 8) 佐々木秀美著：奄美大島歴史深訪 (2)ー島民を苦悩させたサトウキビと家人 (ヤンチュ) 制度，そしてケムン伝説ー，看護学統合研究 Vol.24, No.2, pp49-59, 2023年。
- 9) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡1-11，吉川弘文館，2022-2023年。
- 10) 杉本圭郎著：前掲書1)二。
- 11) 杉本圭郎著：前掲書1)二，p603。
- 12) 杉本圭郎著：前掲書1)二，pp613-614。
- 13) 杉本圭郎著：前掲書1)一，pp528-531。
- 14) 杉本圭郎著：前掲書1)一，pp528-531。
- 15) 杉本圭郎著：前掲書1)一，p163-165。
- 16) 杉本圭郎著：前掲書1)一，394。
- 17) 杉本圭郎著：前掲書1)一，p440-441。
- 18) 杉本圭郎著：前掲書1)二，p15。
- 19) 鴨長明著，市古貞次校注：方丈記，p9，岩浪書店，1996年。
- 20) 鴨長明著，市古貞次校注：前掲書19)
- 21) 鴨長明著，市古貞次校注：前掲書19)，pp14-15。
- 22) 杉本圭郎著：前掲書1)二，p262。
- 23) 杉本圭郎著：前掲書1)二，p476-477。
- 24) 杉本圭郎著：前掲書1)二，pp576-594。
- 25) 杉本圭郎著：前掲書1)二，p587。
- 26) 杉本圭郎著：前掲書1)二，p580。
- 27) 杉本圭郎著：前掲書1)二，p582-583。
- 28) 杉本圭郎著：前掲書1)一，p50。
- 29) 杉本圭郎著：前掲書1)三，pp617-627。
- 30) 杉本圭郎著：前掲書1)二，pp651-660。
- 31) <https://www.worldfolksong.com>。
- 32) <https://www.yoritomo-japan.com>。



- 33) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p360.
- 34) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p363.
- 35) 能勢初枝著：ある遺書ー北摂能勢に残るもう一つの平家物語, クレイ, 2001年.
- 36) 能勢初枝著：前掲書35), p123.
- 37) <https://ja.wikipedia.org/wiki>.
- 38) 能勢初枝著：前掲書35), p35.
- 39) 能勢初枝著：前掲書35), p45.
- 40) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (8) 承久の乱, p169.
- 41) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (3) 幕府と朝廷, p117.
- 42) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p215.
- 43) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p231.
- 44) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p683.
- 45) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p695.
- 46) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p738.
- 47) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p750.
- 48) 五味文彦・本郷和人共著：前掲書41), p98.
- 49) 杉本圭郎著：前掲書 1) 一, p143.
- 50) 杉本圭郎著：前掲書 1) 一, pp143-151.
- 51) 杉本圭郎著：前掲書 1) 一, p63.
- 52) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (2) 平氏滅亡, pp9-10.
- 53) 永田初枝：『新勅撰和歌集』と後鳥羽院一雑歌を中心として一, 日本語と日本文学, 21, 12-20, pp6-20, 1995年.
- 54) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p215.
- 55) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (2) 平氏滅亡, p63.
- 56) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (2) 平氏滅亡, p87-91.
- 57) 佐々木秀美著：前掲書 7)
- 58) 三島村誌編集委員会編：三島村誌, 朝日印刷, 1990年.
- 59) 三島村誌編集委員会編：前掲書58), p117.
- 60) 三島村誌編集委員会編：前掲書58), p128.
- 61) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (2) 平氏滅亡, p11.
- 62) 杉本圭郎著：前掲書 1) 三, p531.
- 63) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p281.
- 64) 杉本圭郎著：前掲書 1) 四, p282.
- 65) 文栄吉著：前掲書 4), p84.
- 66) 山中巖著：馬路村の歴史と伝説, p188, 中島出版印刷, 1996年.
- 67) 山中巖著：前掲書65), pp34-35.
- 68) 山中巖著：前掲書65), p40.
- 69) 山中巖著：前掲書65), p58.
- 70) 山中巖著：前掲書65), pp90-91.
- 71) 越知史談会・越知町教育委員会：横倉山, 2012年.
- 72) 杉本圭郎著：前掲書 1) 一, 394.
- 73) 杉本圭郎著：前掲書 1) 一, p571.
- 74) 杉本圭郎著：前掲書 1) 一, p440-441.
- 75) 杉本圭郎著：前掲書 1) 一, p567.
- 76) 杉本圭郎著：前掲書 1) 一, pp561-588.
- 77) 三島村誌編集委員会編：前掲書58)

- 78) 三島村誌編集委員会編：前掲書58), pp101-103.
- 79) 喜界町誌編集委員会編：前掲書 5 )
- 80) 杉本圭郎著：前掲書 1 ) 四, p23.
- 81) 杉本圭郎著：前掲書 1 ) 一, p394.
- 82) 喜界町誌編集委員会編：前掲書 5 ), p99.
- 83) 喜界町誌編集委員会編：前掲書 5 ), p99.
- 84) 佐々木秀美著：平家落人と源為朝伝説の島－奄美大島歴史深訪（1）, 看護学統合研究, Vol.24, No.1, pp47-55, 2022年.
- 85) 文栄吉著：前掲書 4 ), p81.
- 86) 文栄吉著：前掲書 4 ), p88-89.